日本に『ゴルフ』が持ち込まれて100年を超えた。日本のゴルフ振興にと取り組んだ人たちの姿を取材メモと写真で追う。

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史

＜はじめに＞

日本に西洋のスポーツ『ゴルフ』が持ち込まれて100年を超えた。
いま、日本国内のゴルフ場数は約2千か所を超え、ゴルフ王国アメリカの1万余に次ぎ、英国や豪州をしのぐ。人口は1千万人といわれた時代があった。ここまで成長した裏には先人たちのゴルフを愛する精神があったからだろう。長年の取材で残ったメモや写真から、ゴルフ振興に取り組んだ人たちの姿を追ってみたい。
（文中敬称略）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（1）

【明治29年にクラブを振った軍人さん】

日本にゴルフというスポーツが持ち込まれたのは明治時代のことだが、日本人の手による、日本人のためのゴルフ場といえば1913（大正2）年に創設された東京ゴルフ倶楽部だ。日銀総裁、大蔵大臣を歴任した井上準之助が、アメリカのニューヨーク支店に勤務した時分、ゴルフに熱中した。中年を過ぎたビジネスマンにとってはこの上もないスポーツだ、と絶賛して帰国後、ゴルフ倶楽部創りに奔走し、会員制の東京ゴルフ倶楽部を誕生させた。

その時代、日本にあったゴルフ場は神戸六甲山上にイギリス人が造った神戸ゴルフ倶楽部と長崎にあった雲仙ゴルフ場くらいで、ゴルファーといえばビジネスで海外に出かけた時ごとの余暇にゴルフを覚えたというビジネスマンが多かった。

それ以前のこと、ゴルフをやったという記録はなく、イギリスの海軍大学に留学した水谷叔彦（みずたに・よしひこ）が第一号ゴルファーとみられる。水谷は海軍機関学校を卒業したエンジニアで、明治20年代の初めに英国へ留学して1896（明治29）年1月の日誌に『Golfingをなす』というたった1行の記録が残されている。しかし水谷は海軍の軍人という立場上、ゴルフを継続した記録はない。退役後、北海道の室蘭製鉄所の役員に就任してゴルフを楽しんでいる。室蘭にある、イタンキのゴルフ場で水谷が設計の助言をなしたと伝えられている。

《写真》
昭和初期、東京ゴルフ倶楽部のコースでプレーを楽しむ水谷叔彦＝右端

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（2）

【女性キャディーの登場】

今日、ゴルフ場で働くキャディーといえば、主婦など女性が活躍しているが、女性のキャディーの登場は比較的歴史は新しい。日本に会員制のゴルフ倶楽部が生まれたのは1913（大正2）年のこと。その頃は外国を見習って少年達が雇われてキャディーを務めた。ところが、日本は昭和の時代に入ると戦時色が強まり、青年たちは兵役に服し、ゴルフ場は人手不足に悩んだ。とりわけキャディー役が不足し、キャディー役を若い少女達に託した。キャディー役は頑強な少年の仕事だったが、少女にバトンタッチされて新しい歴史が流れ出した。

少女のキャディーは、欧米では珍しくない。1930年代には女性の競技には少女キャディーが付き添っていた。日本で少女のキャディーが登場したのは昭和10年代に入ってから。神奈川県下にある相模カンツリー倶楽部だった。

キャディーの人材不足は戦後も続き、関東にある各ゴルフ場は女性キャディーを本格的に雇用して女性の職場であることを確立した。

地方町村から集団就職の形で人材を確保したゴルフ場もあり、宿舎を建て、花嫁修業が就職のプログラムに入っていた。やがて家庭の主婦が登場した。キャディーの業務が機械化され、業務の内容はバッグを担ぐ仕事からバッグを乗せたカートを引っ張ることに変わった。現在はプレーヤーを載せた常用カートを運転するまでになり、機械力の進歩による顕著な変化で、暑さや寒さの環境の厳しさを除けば、健康で実入りいいアルバイトといえようか。

《写真1》

《写真2》

《写真》
1）女性キャディーが脚光を浴びるきっかけになった昭和29年の日本オープン選手権～東京GCで
2）日本のゴルフ場に初登場した少女キャディー＝相模CC

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（3）

【パティー・バーグ相手に『伊代ちゃん』奮闘】

1960(昭和35)年頃のゴルフ界は、アマチュアの競技が脚光を浴びた時代で、若い競技者が日本の選手権に続々と登場して活躍した。その3年前に日本はカナダ・カップに優勝し、その影響でゴルファーが増え、各地でゴルフ場の建設が盛んになった。

1961(昭和36)年秋、アメリカ女子プロの大御所パティー・バーグ（1918～2006）が用品メーカーの招きで来日し、東京ゴルフ倶楽部で日本のプロを相手に模範プレーを披露した。お相手を務めたのは東京ゴルフ倶楽部専属の陳清波、永井謙治、これに女子プロの杉本伊代子が加わり18ホールをプレーした。

コースには会員やその家族多数が詰めかけ、アメリカ女子プロ第一人者の一挙一動に熱い眼が注がれた。当時、日本のゴルフ界は女子プロ夜明けの時代で、大倉喜七郎に育てられた杉本伊代子、幸子の姉妹、中村寅吉に育てられた樋口久子らの女子プロの卵たちが研修会を開いて腕を磨いていた。そんな矢先、先進国アメリカから女子プロの創設者の来訪で、バーグを中心に模範プレーが開かれ、当時日本の第一人者と見られた伊代子が出場した。

バーグは観戦者たちと気さくに言葉を交わしながらボールを打った。大勢の女性観客に向かって『世の奥さま方、家庭に閉じこもることはないよ。コースに出て白球を思い切り叩きましょう』と大声で呼びかけた。

　初めて大きな舞台に立った伊代子は、当初固くなっていたらしく、ミスが目立ったが、ホールを重ねるうちに固さがほぐれ、川奈で鍛えられた力を発揮して、バーグも目を見張った。バーグの普及活動で女子ゴルファーが次第に増え、女子プロの誕生に拍車がかかった。

バークは東京GC訪問を記念して後日、カップを寄贈したが、このカップを争う『パティー・バーグ杯』は女子の会員間で今も盛んに行われている。

《写真》
手前からバーグ、陳清波、杉本伊代子
～東京ゴルフ倶楽部で

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（4）

【16歳で大物ぶりを発揮した近衛少年】

大物ゴルファーといわれた近衛文隆（1915～1956）が、日本のゴルフ界で注目されたのは弱冠16歳の時である。1931（昭和6）年の日本アマ選手権は大阪の茨木カンツリー倶楽部で行われ、37人が参加した。この時、近衛少年は初出場ながら36ホールの予選を180打（92・88）で回り、3位で通過して話題になった。

近衛少年のスコアは、パワーがある今日の若者のスコアとは比較にならないが、当時の用具やボールの品質は幼稚で、機能的に劣っていた。ところが近衛少年のスコアは、この大会のメダリストになった相馬孟胤の174打から僅か6打の遅れ。特筆すべきだろう。

予選を通過した近衛少年はマッチプレーに入って1回戦で山形晋を6－4で下し、2回戦に進出したが、西垣正太郎に4－2で惜敗した。だが、初陣で予選をパスし、マッチプレーの2回戦進出の快挙は誰しも予想すらしなかった。

この活躍に熱い目を向けたのは、日本ゴルフ協会生みの親である大谷光明だった。

近衛は翌1932（昭和7）年にアメリカ留学、その後、陸軍将校としてシベリアに渡った。終戦後、ソ連に抑留されて消息が途絶えていたが、1955（昭和30）年頃にソ連から送還された抑留者から収容所での近衛の様子が知らされた。収容所でゴルフの格好をしてみんなを笑わせていた、という。だがその翌年、イワノボ収容所で病死したことが発表されて、知る人はその死を悔やんだ。

《写真》
1931（昭和6）年の日本アマ選手権に初登場した時の近衛文隆

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（5）

【アマチュアがプロに挑戦した痛快物語】

アマチュアゴルファーの大物として知られた近衛文隆（1915～1956、5摂家筆頭・近衛家、近衛文麿元首相長男）は、幼少期からゴルフに親しみ、アメリカプリンストン大留学中はゴルフ部の主将として活躍していた。昭和10年代のこと。当時は日米間の空気が重苦しく、いずれは戦争か、という険悪な時代だった。

近衛は留学から帰国後、父の秘書官に就任した。そのため、好きなゴルフを楽しむ時間もなく、アマチュアの競技に出たくとも出られない悶々とした日々を送っていた。

ある日のこと。当時トップクラスのプロとして活躍していた陳清水、林万福の二人に、『いざ勝負！』という挑戦状を叩きつけた。これが ゴルフ界では大きな話題になり、“ゴルフ界のプリンスがプロに挑戦”として新聞、雑誌で取り上げられた。

米国留学中には、学生ゴルフの日米対抗戦を企画し、殺伐とした日米間の空気を少しでも和らげようと、日本ゴルフ協会（森村市左衛門会長）に協力を要請するなど、大局的な立場で対応する考え方が注目された。

さて、話題の試合は1939（昭和14）年6月30日、今はない武蔵野CC（藤ケ谷コース）で行われた。36ホールのベストマッチ。プロ組が勝てば賞金。負ければ頭を坊主にするという奇妙な取り決めだった。同年の日本アマチャンピオン原田盛治と組んだ近衛組は、午前のラウンドは善戦したが、午後はプロ組が底力を発揮して3ポイントリードして決着となり、ボース頭になるのを逃れた。

近衛はこの競技でのパワーフルなショットが話題となったが、その後、兵役に服した。終戦後シベリアに抑留されて帰らぬ人となり、1956（昭和31）年、夫人に抱かれて無言の帰国をした悲劇の人だった。

《写真》
プロに挑戦したマッチの1コマ
左から近衛文隆、陳、林、原田

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（6）

【近衛文隆さんの無言の帰国】

第38・39代内閣総理大臣近衛文麿の長男・文隆は1931（昭和6）年、16歳の若さで日本のゴルフ界に彗星のごとく現れ、大物ぶりを発揮して日本アマ選手権や東西対抗戦の活躍で大きな話題になった。だが、ゴルフの環境は文隆には利あらずで、アメリカ留学から帰国後、総理大臣の秘書官として分刻みの忙しさだったといわれた。そのうっぷん晴らしがプロへの挑戦だった。当時、交流が深かった原田盛治は東大に進学して、日本アマのチャンピオンになっている。文隆にとっては羨ましいの一言だったろう。

文隆は総理大臣の秘書官となってやがて上海に渡り、日本陸軍の将校として兵役に服した。だが終戦となり、戦犯としてソ連軍に連行されてしばらく行方不明と伝えられたが1956年にイワノボの捕虜収容所で病死が発表された。

死後、こんなひと幕があった。1958年のこと。第1回の世界アマチュアチーム選手権がスコットランドで開催され、日本チームは野村駿吉JGA副会長を団長に出場した。チームはロンドン発の飛行機で帰国したが、この便には奇しくも文隆の遺骨が乗り合わせた。遺骨は正子夫人に抱きかかえられて無言の帰国だった。偶然とはいえ、日本チームと同道で母国の地を踏むとは・・・。

《写真》
1）在りし日の近衛文隆
2）文隆さんが満州に出かける際に撮影された近衛文隆氏：左端

《写真1》

《写真2》

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史(7)

【通隆氏が語る近衛家のゴルフ】

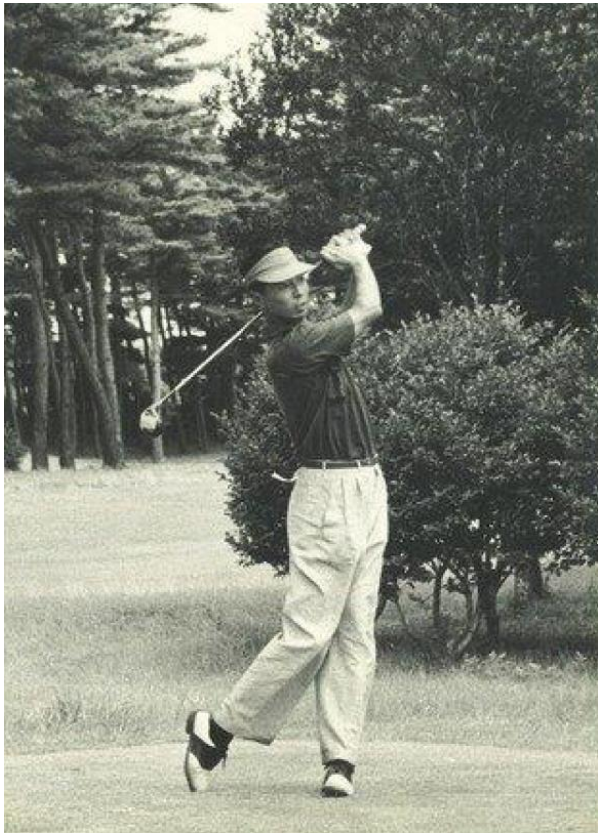
近衛家の次男で、日本ゴルフ協会会長や東京ゴルフ倶楽部理事長を歴任した通隆が健在の頃、近衛家のゴルフについて語ってもらったことがある。

近衛家は内閣総理大臣を務めた文麿を筆頭に千代子夫人を始め、ゴルフ愛好者ぞろいで、毎年夏になると一家そろって軽井沢で過ごすのが恒例になっていた。近衛家は二男二女で、男子は文隆、通隆の二人。少年時代からゴルフに馴染んでいた。

通隆は『ゴルフは親から教えられたのではなく、夏の間、家族で軽井沢で過ごすのは子供にとっては退屈で、親がコースに出ている時、親のクラブをこっそり持ち出し、コースの片隅でボールを打ったものです。いつしか飛ぶようになり、ゴルフとはこんなものと、基本を覚えました』 と話した。だから文隆のように16歳の若さで、大人を相手に戦える基本技術と作法を覚えたのだろう。

しかし、世相は不穏でゴルフどころではない時代になったために、文隆氏には競技歴がない。弟の通隆氏は兵役には服したが、ホームコースの相模CCは日本に駐留した米軍の接収を免れたため、戦後同コースで開かれた関東アマチュア選手権に優勝経験がある。その通隆氏はこう語っていた。

『兄文隆のゴルフのスケールの大きさは、我々のものとは比較にならないほど桁違いだった。打ったボールの勢いの強さ、弾道の高さは足元に及ばなかった』と首をすくねた。



《写真》
近衛家のゴルフを語る近衛通隆さんのプレー

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（8）

【ゴルフの聖地の夏と冬】

ゴルフ発祥の地といわれる英国スコットランドのセント・アンドルーズはゴルファーなら『1度は足を運んでみたいところ』といわれている。この地区には4つのコースが点在していて、ゴルファーを歓迎してくれる。中でも有名なのは英国オープン選手権の舞台になるオールドコースだ。

ここにはゴルフ規則の総本山『Ｒ＆Ａ（ロイヤル・アンド・エンシェント・オブ・セント・アンドルース）』があり、そのハウスの正面がオールドコース1番のスタートホール、隣接（ティーからホールに向かって左側）して18番がある。1番と18番を小川が横切っている。18番に架かっているのがローマンブリッジといわれる石橋で、勝者がこの橋を渡って最終ホールに向かうといわれている。

『Ｒ＆Ａ』倶楽部のハウス右側にある四角い5階建ての建物はセント・アンドルーズ大学の女子寮。18番ホール右沿いに並ぶ建物は、ここを本拠とする各クラブハウスで、五つの倶楽部のハウスが並んでいる。この土地は市有地で、各倶楽部が仲良く使っている。買い物に出かける市民が、コースを横切る道路を頻繁に通過するのが夏の聖地の表情だ。

この地の冬景色はあまり知られていないが、発祥の地だけあって市民は冬でもゴルフを楽しむようだ。この地で見かけたのはスパイクが装てんされたゴム長のシューズ。発祥の地ならではの用品だった。

《写真》
1）セント・アンドルーズオールドコース18番全景
2）セント・アンドルーズ冬景色

《写真1》

《写真2》

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（9）

【ゴルファー天国・北海道の夜明け】

夏、涼しい北海道はゴルファー天国といわれて久しいが、いまこの地にはおよそ200のゴルフコースがあり、夏場になると大勢のゴルファーが押しかける。2020年は新型コロナウィルスのせいで、例年ほどではないようだが、北海道特有の涼しい気候や西洋芝に覆われたコースに対する人気は抜群だ。

北海道にゴルフ場が創設されたのは昭和の時代に入ってからだ。三菱のビジネスマンだった佐藤棟造が北海道に転勤した大正時代の初めは、この地にはゴルフ場はなく、春の雪解けを待って札幌の円山公園でボールを打った。やがて銭函（小樽市）の海岸に3ホールのコースを造り、仲間を誘って『ゴルフとは…』と普及に懸命だった。

やがて小樽ゴルフ倶楽部の創設にこぎつけ、北海道のゴルフは夜明けを迎えた。その頃、函館競馬場内にも赤星四郎が関係していたコースがあった。

1932（昭和7）年、月寒（つきさむ）に札幌ゴルフ倶楽部が誕生した。ところが倶楽部ハウスを建てるほどの資金がなく、会員たちは知恵を絞って、北海道開拓時代に走っていて廃車になった客車を譲ってもらい、倶楽部ハウス代わりに使った。同倶楽部のプロとして昭和30年代に活躍した佐藤敏夫は『会員の皆さんは、駅弁を食べながらまるで旅行気分を楽しんでおられ、キャディをやった我々も会員と一緒に駅弁を頬張ったものです』と話していた。だが、このゴルフ場は太平洋戦争中に消えた。

《写真》
札幌GCの客車を転用したクラブハウス
車両を前に会員たちの記念撮影

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（10）

【草創期、女性ゴルファ―たちの服装】

日本のゴルフ草創期における女性たちはどんな服装で楽しんでいたか。ゴルフは今日のように誰しもが楽しめる時代ではなく、ましてスポーツとなれば、とくにそれ用のウエアもなかった。その時代はスポーツとは男性のもの―という風潮が強く、先人たちは服装の調達にはご苦労があったようだ。

いま、ゴルフはご女性の間では人気のあるスポーツで、用品店には色や形の違うしゃれたスポーツウエアがにところ狭しと並んでいる。競技種目ごとのウエアが豊富で、ファッションを楽しむことができるのが人気の根源かもしれない。陸上のへそ出しルックも男性の目を引き付ける。

さて、草創期におけるゴルフの服装は、テニスウエアが主流だった。白を基調としたもので、長袖、ロングスカートで優雅にゴルフを楽しんでいた。まして女性の間では声高らかに爆笑とはゆかず「おしとやか」がモットーだったようだ。

日本における女性ゴルファーの草分けといわれる三井栄子（1895～1977）は、大正時代からのゴルファーだが、テニスからゴルフに転向した時、『どんな服装でクラブを振ったらいいか・・・』と思案したそうだ。

日本における女子ゴルフ競技の始まりは、1926（大正15）年の関東、関西婦人対抗戦だがロングスリーブにロングスカートという白ずくめの服装だった。それ以前は和服姿でボールを打っていたらしい。この姿だと長いパットが決まったからといってこぶしを振り上げることもできなかっただろう・・・。

《写真》
昭和初期、和服姿でゴルフを楽しむ赤星四郎夫人

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（11）

【女子ゴルフの草分け三井栄子（さきこ）さんのゴルフ】

日本の女子ゴルフの草分け的な存在といわれる三井栄子は、「だんじり祭り」で知られる岸和田藩にご縁のある方で、 1915（大正4）年に三井家に嫁ぎ、三井弁蔵夫人となってニューヨークやヨーロッパでの生活が長かった。女子学習院時代からテニスを嗜み、ニューヨークなどで楽しんでいた。

ある日のこと、ニューヨークで親戚筋に当たる新井領一郎（ニューヨーク在住の生糸商）とスポーツ談義を交わした際、新井から『テニスは年齢を重ねると苦しくなるから、歳をとっても楽しめるゴルフをおやりなさい』とゴルフの良さを解かれて趣味をテニスからゴルフに変え、夫とともにゴルフ場通いが始まった。海外での生活が終わり、帰国してゴルフが続けられる環境ということで東京・世田谷区の深沢に居を構えた。近くには日本で初めての会員制のゴルフ場、東京ゴルフ倶楽部があり、日本でのゴルフ場通いが始まった。その間の事情について三井は『ニューヨークでのゴルフは、テニスの服装でコースに出ましたが、日本では着物姿でコースに出るのでしょうか』と服装のことが気になったそうだ。

日本の大正時代のスポーツ界は、今日のような女性用のスポーツウエアなどはなかった。テニスでは長袖、ロングスカート姿でボールを追っていた。

女子ゴルフ競技が始まった1926（大正15）年には関東、関西の対抗で見みられる服装も、やはりロングスカートのテニスウエア姿だった。昭和の時代に入り、動きやすさを追求してスカートの丈が短くなったようだ。

《写真1》

《写真2》

《写真》
1）スカートの丈がやや短くなった服装が目立つ昭和に入ってからの女子ゴルフ対抗戦の集合写真
2）日本髪姿の三井夫人

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（12）

【女性にマッチプレーは酷か？ 】

関東の女子ゴルフ選手権は1955（昭和30）年の創始だが、翌年の第2回から競技方法がマッチプレーに変更された。1日目、参加者全員が27ホールをプレーし、上位8人が2日目からのマッチプレーに進み、最終日は27ホールのマッチプレーで優勝を争った。

東京の新聞各紙はこの女性競技を写真入りで記事として扱っていた。その間、注目されたのは1956（昭和31）年、東宝の映画女優だった荒川さつきの優勝であった。大衆化のあらわれとして職業を持った女性ゴルファーが急増したのは特筆ものだった。

銀座の社交場で働く女性たちが客に誘われてクラブを振り始めた。ゴルフは誘客の武器になったそうで、こうした流れを好ましく思わなかった戦前派の奥様も多かった。

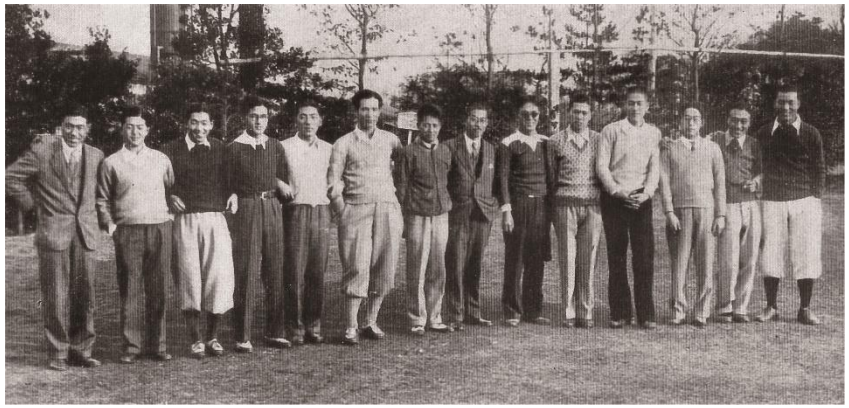
ところが新勢力の女性たちは、年齢的にも若く上達も早かったため早晩、彼女たちが天下を取るだろうと陰で囁かれていた。ある年のマッチプレーでこんな一件があった。優勝争いで奥様族と新勢力の対決があり、結果は奥様族の勝利。競技終了時に二人は握手を交わすかどうかに周囲の関心が集まったが・・・。敗者は形通りに握手を求めたが、勝者はプイと背を向け、ハウスに姿を消した（気が付かなかったか？）。

頭を痛めたのは主催者側で、役員会で「マッチプレーは女性には酷」と競技方法の変更を決め、8回目（1962）の年からマッチプレーを廃止した。マッチプレーは重要な競技方法の一つだが、なぜか、アマチュア、プロともにご縁が薄い。学生競技もしかり。僅かに戦前派の倶楽部競技に残るのみだ。

《写真》
昭和31年、関東女子ゴルフに優勝の荒川さつき（小金井CC）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（13）

【学生ゴルフの生い立ち】



大学生らのゴルフを統括する学生ゴルフ連盟が創立されて、今年で85年になる。連盟の立ち上げ推進役は、東京・神田にあったスポーツ書籍を専門に出版していた目黒書店（目黒四郎社長）で、ゴルフの専門雑誌を発行していたことから、1931年（昭和6）年、学生ゴルフを統括する連盟を立ち上げた。発起校の慶応義塾、早稲田、明治と加盟校法政の各校が集まり、設立総会を開いた。1935（昭和10）年の2月2日のことだった。

「学生ゴルフ界のために加盟校が相互の連絡をとりながら、健全なる発展を図ること」という目的のもと、競技会開催を視野に入れ、委員長（会長職）には小寺酉二（1897～1976）、顧問役に赤星四郎と堀込乕之介が就任した。

連盟事業のプログラムに従い、まず同年3月に加盟校による招待競技（大学対抗戦）を東京・駒沢のパブリックコースで、さらに9月には埼玉県の霞が関カンツリー倶楽部で第1回の関東学生ゴルフ選手権を開催した。

この競技には慶應義塾、早稲田、高千穂高商、東京帝大、旧制浦和高、法政、学習院の各校からの参加者があり、学習院の木場貞輝が初のチャンピオンになった。

一方、関西の学生からこの組織に参画を希望する声があがり、翌1936（昭和11）年に関東学生の名称を全日本と改めた。しかし、日本は戦時色が強まり、舶来色の濃いスポーツはことごとく禁止された。兵役に服す学生が多く、戦前の学生ゴルフは短命に終わった。

《写真》
連盟創立以前の1932年に行われた慶應、帝大、法政3大学対抗マッチ
右端は法政野球部のエースとして活躍した若林忠志。ゴルフ部でもエースだった

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（14）

【学生ゴルフの紆余曲折】

現在、学生ゴルフの競技は日本学生ゴルフ選手権(公益財団法人日本ゴルフ協会：JGA主催)を筆頭に関東、関西、中部、九州、北海道など各地区別の学生ゴルフの組織が活動している。だが、学生とはいえゴルフ倶楽部の会員であれば、地区別の一般の競技にも出場できる。そのためだろうか、以前よりも学生ゴルフの組織力が弱くなったともいわれている。学生のプロ予備軍的な動きもあり、学生ゴルフの組織強化が求められている。

太平洋戦争中、スポーツは自粛させられていたが戦後、日本に駐留した米軍のおかげで、芋畑になっていたゴルフ場は復元されたため、ゴルフの復興は早かった。学生ゴルフは朝日新聞社がその活動を支援した。1953（昭和28）年に学生連盟が復活、9月には戦後初の関東の学生競技会が開催され、慶應義塾の松本富夫が優勝した。また学生の技術向上を願い、ベテランゴルファーを招いて学生のための講習会を開くなど、ひたすら学生ゴルフの普及に力を注いだ。

さらに、11月には戦争で中断されていた全日本学生の競技を兵庫県の廣野ゴルフ倶楽部で復活させた。優勝は松本富夫。この競技が、今日の日本学生選手権に繋がっている。主催は関東、関西の学生ゴルフ連盟で、朝日新聞社が後援だった。しかし1959（昭和34）年から主催は日本ゴルフ協会に代わった。朝日新聞社が後援から降りたこともあり、財政的な面から、JGAが主催を引き受けて、今日に至っている。

《写真》
日本学生選手権の開催をJGAが引き継ぎ、
挨拶する野村JGA副会長～霞ケ関CCで

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（15）

【『ハッとしてキャッとした』曲打ち】

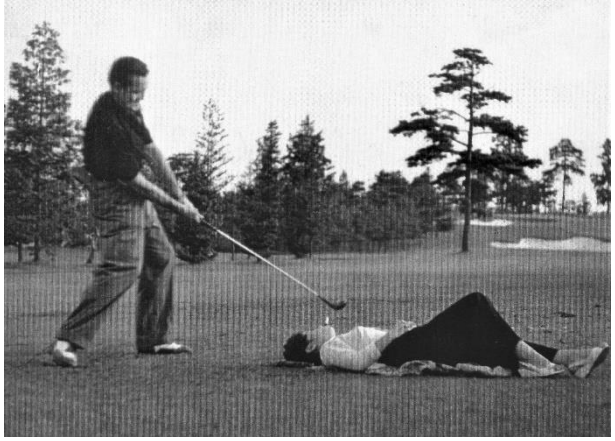
戦後、日本の経済が安定し、ゴルフが急激に普及し始めたのは昭和30年代に入ってから。だがまだその時分は、古いゴルフ場は日本に駐留した米軍との併用が多かった。1957（昭和32）年はカナダカップが霞ケ関カンツリー倶楽部で開かれた年のことだが、日本に駐留する米軍兵士の慰問に米本土から多くの芸能人やプロスポーツ選手がやって来た。その年の夏、埼玉県の東京ゴルフ倶楽部にポール・ハーンというゴルフの曲打ち名人がやって来た。曲打ちというだけあって、とてつもなく長いシャフトのクラブで打って見せたり、椅子に腰かけたままボールを打ったり、スライスやフックボールはお手のもの。そのうちハーンがとてつもない注文を出した。

『誰かティーにボールを乗せて、それを口につわえて寝てくれないか』

慌てたのはこの催しを開いた東京ゴルフ倶楽部で『危険この上もない』と野村理事長以下、倶楽部支配人が鳩首会談を始めた。2、30分経過したところでゴルフ場勤務という若い女性従業員が『私が引き受けます』と名乗り出た。『待ってくれよ』とゴルフ場側は止めに入ったが、彼女はボールを乗せたティーをくわえてハーンの前で横になった。するとハーンは深呼吸を繰り返してからドライバーを一振り。満場、ハッとして思わず目をつぶった。その瞬間、白いボールは勢いよく飛び出し、女性はゆっくりと起き上がった。

この勇敢なる女性は霞ケ関カンツリー倶楽部に勤務しており、後日同倶楽部所属プロだった新井常吉と結婚した。新井は1956（昭和31）年の日本プロ選手権、決勝で林由郎に敗れた。

『怖かったけど、早く終わってくれればいい。それだけ考えていました』恐怖の事後の勇敢なる彼女の感想である。



《写真》
女性の顔面上でティーショットを放つ
ポール・ハーン～1957年東京ゴルフ倶楽部

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（16）

【全国展開の『日本ゴルフ週間』 腕自がチャンピオンに挑戦】

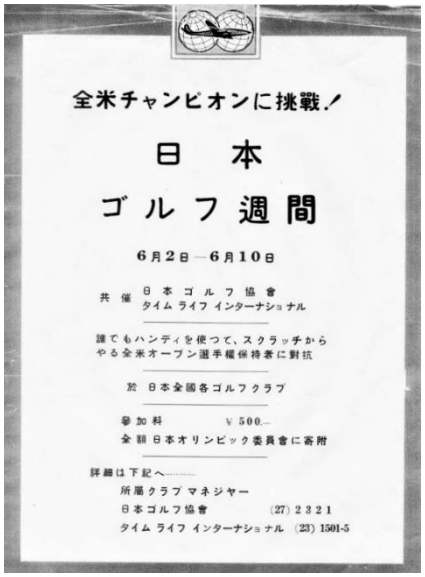
いまから60年余り前、1956（昭和31）年の話だが、ゴルフの普及に拍車を掛けようと日本ゴルフ協会（JGA）とアメリカの雑誌タイムライフ社が共同で『日本ゴルフ週間』という企画を催した。内容は、腕自慢のゴルフ愛好家がトッププロへ挑戦するという企画だ。

具体的に説明すると、腕自慢のゴルファーに『全米オープンのチャンピオンに挑戦しませんか』と呼び掛けたものだった。挑戦者はスコアカードを1枚500円で買い、好きなコースで、好きな日に18ホールをプレーし、ハンディキャップを差し引いてスコア（ネットスコア）を算出する。被挑戦者のスコアは、オープン選手権の最終ラウンドのスコアとし、これよりいいスコアなら挑戦者の勝ち。勝てば主催者から『あなたは全米オープンのチャンピオンを破った』と記されたトロフィーが贈られた。そして、その売上金の一部は日本オリンピック委員会に寄付され、同年のメルボルンオリンピックの選手の派遣費用に充てられた。

この種の催しは10年間続けられ、ゴルフの普及に役立ったばかりではなく、売上金の一部はオリンピック選手の派遣費の一助になったり、プロゴルフ協会の運営資金にも役立った。

《写真》
1）ゴルフ週間のポスター
2）勝者に贈られたトロフィー

《写真1》



全米チャンピオンに挑戦！

日　本

ゴルフ週間

6月2日—6月10日

共催　日本ゴルフ協會
タイム ライフ インターナショナル

誰でもハンディを使つて、スクラッチからやる全米オープン選手權保持者に對抗

於　日本全國各ゴルフクラブ

參加料　¥500.—
全額日本オリンピック委員會に寄附

詳細は下記へ……
所屬クラブ マネジャー
日本ゴルフ協會　(27) 2321
タイム ライフ インターナショナル　(23) 1501-5

《写真2》

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（17）

【岸さん、ゴルフ週間開幕に一役】

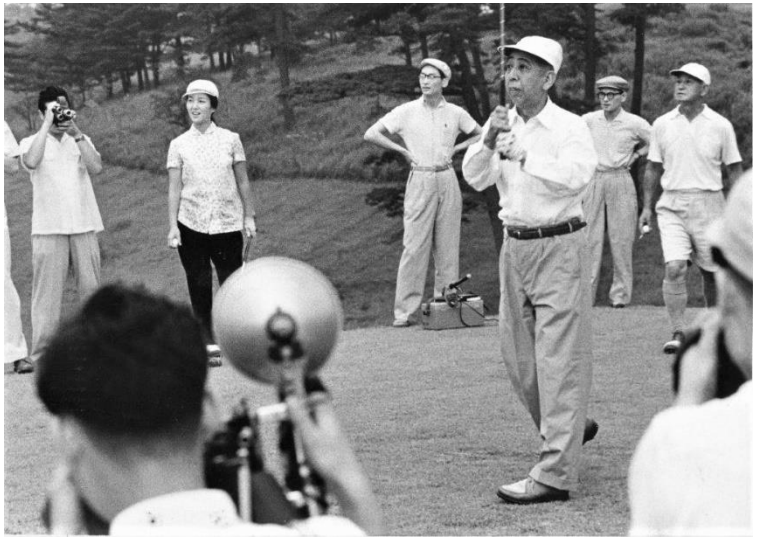
1957（昭和32）年度『ゴルフ週間』の開幕は、岸信介総理が開幕のプレーに出場して大きな話題になった。オープニングのプレーが行われたのは旧程ヶ谷カントリー倶楽部（現在は横浜国大のキャンバス）のコースで、岸をメインゲストにホスト役が野村駿吉（日本ゴルフ協会副会長）、女優でゴルフのうまい荒川さつきに在日米軍のスミス司令官の4人組。夏の到来を告げる蒸し暑い日だった。

主賓の岸はこの年に56代目の内閣総理大臣に就任したばかり。年の初めにはアイゼンハワー米大統領（愛称アイク）とワシントンで日米首脳会談を終えたところだった。日本ゴルフ協会副会長の野村が懇願して岸の出場が実現した。

ワシントンでの日米首脳会談後、岸はアイクとワシントン郊外のコースでプレーし、記念にゴルフセットが贈られた。ベンホーガンモデルのフルセットだった。

岸はこのクラブを持ち込み、お披露目をした。コースにはスポーツ記者や政治部の記者らが大勢詰めかけたが、話題はもっぱら、アイクから贈られたというクラブに集中した。

いざ、スタートとなると1番のティ―グラウンド周辺はカメラマンが取り囲んだ。すると岸はギョロ目で周囲を見渡しながら『おーい！危ないぞ。気を付けてくれよ。このクラブにはまだ慣れていないからどこに飛ぶかわからんぞ』と注意を促した後、国会における答弁のごとく「そつなく」会心のショットをフェアウエーの真ん中に放ち無事、大役をこなした。



《写真》
ゴルフ週間開幕日のゲストとして、
程ヶ谷CCの1番で第1打を放った岸さん
荒川さつきさんと共に

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（18）

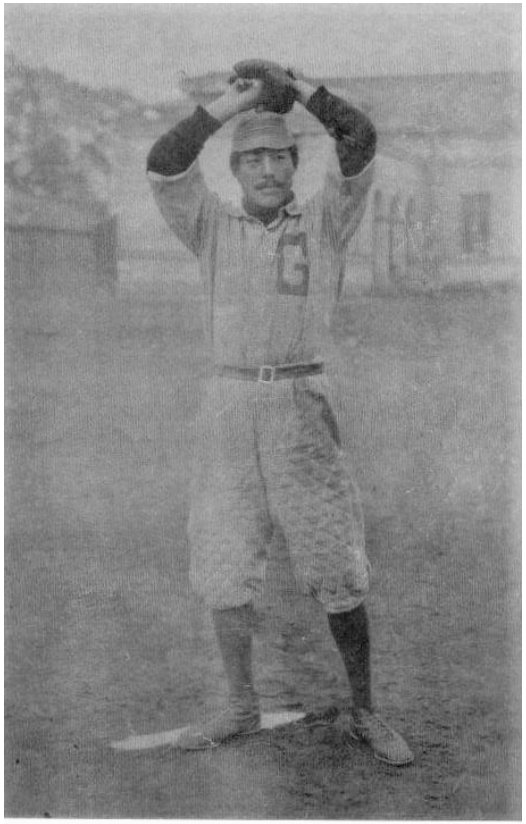
【韋駄天『三島弥彦』のスポーツ歴】

2021年は『オリンピックイヤー』。夏には東京で2度目のオリンピックが開かれる。昨年、開催の予定だったが、新型コロナウィルス感染拡大で1年延期された。そこでオリンピックにちなんだ話題を追ってみたい。日本が近代オリンピックに初めて参加したのは1912（明治45）年のこと。ストックホルムで開かれた第5回大会の陸上競技に三島弥彦と金栗四三が出場した。当時は海外に出向くといっても今日のような便利な飛行機はなく、船と汽車による長旅だった。一行は嘉納治五郎（講道館創設者）を団長に、日の丸を掲げて入場行進をした。三島は短距離に、金栗はマラソンンに出場したが、メダルはおろか、決勝までは進めず、金栗は途中棄権した。

三島は幼少期から運動神経が抜群によかった。特に「かけっこ」が得意で百メートル11秒8、二百メートル25秒3の日本記録を持っていた。今なら中学女子程度の記録だろう。スキーは日本にスキーの技術を伝えたレルヒ少佐に指導を受けたという。それ以外にはボート、スケート、馬術、野球をこなした。体格面で優れ、日本人としては大柄（170センチ）な部類に属していた。

家人によると『陸上の短距離走ではスタートが遅かったそうで、三島は『人様より早く飛び出すのは嫌だ』が口癖で周囲が走り出してからスタートをした。それでもゴールでは真っ先にテープを切っていた。

野球は学習院時代には本格派の投手として鳴らし、18歳の時から口ひげを蓄えていた。



《写真》
三島の学習院中等科時代のユニフォーム姿

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（19）

【「体操ニッポン」近藤天（たかし）さんの宮内省での倒立】

『体操ニッポン』の名を世界的に広めた人物として日本体操協会の会長を務めた近籐天（1911～1994）の名を忘れることができない。近藤は1932（昭和7）年、ロサンゼルス五輪に出場した体操の元日本代表だ。無類のゴルフ愛好家だったが、そのことを知る人は少ない。東京ゴルフ倶楽部がまだ埼玉県の朝霞にあった頃、27歳の若さで入会した。

『その時の入会金が4百円、それに株を3百円持たされて合計7百円もかかったよ』と入会当時のことを語っていたことがある。1938（昭和13）年のことだった。

当初は渋々のゴルフだったが、ある日のこと倶楽部競技の『宮内大臣杯』に出場して優勝した。松平恒雄が大臣だった時でグロス85、ハンディキャップ20、ネット65。松平宮内大臣が英国から持ち帰った立派なカップを手にした。当時のしきたりに沿ってお礼のために宮内省に参上した。いつしか話は体操のことになり『一度、やってくれないか』と松平が要求し、近藤は説明無用とばかり、応接室の椅子の上で倒立を披露した。

すると松平は大喜びし『ちょっと待ってくれ』と女官たちを集めて『もう一度、頼むよ』とリクエスト。そこで近藤さんはまた椅子の上で倒立を披露した。『わたしゃ、この時はしかたなくやりましたよ』と、渋い顔で語ってくれたことがある。

1932（昭和7）年のロサンゼルス五輪に出場した近藤さんは、苦手の『あん馬』で思うような演技ができず、不本意な結果に終わった。この失敗が起爆剤となり『体操ニッポン』誕生のきっかけになったという。

《写真1》

《写真2》

《写真》
1）日本体操協会会長 近藤天
2）埼玉県朝霞にあった時代の東京ゴルフ倶楽部

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（20）

【ハンディキャップの差は1ながら…レスリングの八田と体操の近藤】

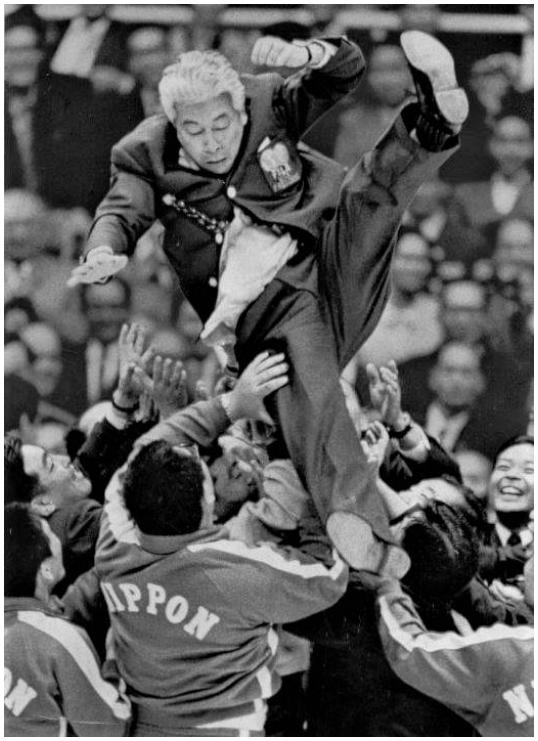
相撲の社会では『一段（番付）違えば虫けら同然』という言葉がある。実力の社会を表現する厳しい言葉だ。だがゴルフのハンディキャップは数字が一つ違うといっても親交の度合いには変わりがない。

敗戦国の日本がオリンピックに参加できたのは、戦後7年が経った1952（昭和27）年のヘルシンキ大会だった。水泳の古橋廣之進は矢継早に世界記録を樹立、金メダルが期待された。しかし、その時すでに全盛期を過ぎ『フジヤマ・トビウオ』のニックネームは残っていたものの、無残な敗戦で、実況中継のアナウンサーは『古橋が敗れました』と泣き声で伝えた。

水泳に代わってレスリングと体操が日本の顔として台頭が顕著だった。レスリングは八田一郎（1906～1983）、体操は近藤天（1911～1994）という熱血漢に率いられ、ヘルシンキ大会では石井庄八がレスリングフリースタイルのバンタム級で金メダル。一方体操では小野喬らが銅メダルを獲得し注目された。

体操は近藤天が先のロサンゼルス五輪の経験を生かして強化を図り、レスリングは八田が柔道からレスリングに転向して、世界制覇を目指した。ユニークだったのは1964（昭和39）年の東京五輪に向けて八田が主張したレスリング強化策で、スポーツ愛好家の記憶から消えない。選手の眼力を鍛えるため上野動物園の檻の前でライオンと睨み合いをさせた。『負けたら（髪の毛を）剃るぞ！』は有名な檄だった。

近藤、八田共に趣味のゴルフではお互いを意識した。二人は名門東京ゴルフ倶楽部の会員で、ゴルフ歴の長い近藤は『私はショートアプローチが下手だったけど、八田さんよりハンディが1つ少ないので鼻が高かった』とは存在感を意識した言葉ながら友好関係は不変だった。



《写真》
レスリング選手団に胴上げされる
東京五輪での八田一郎

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（21）

【JGAの団旗とパレード】

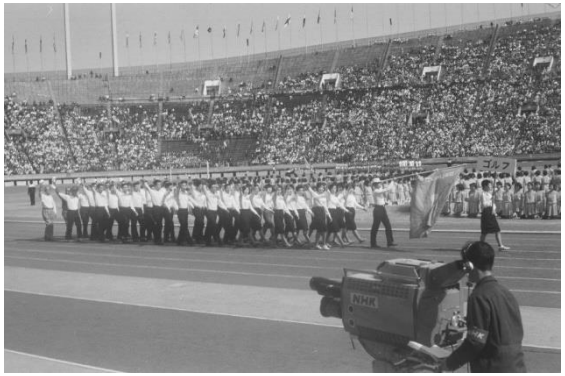
日本ゴルフ協会(JGA)には団結の象徴である団旗（JGAの旗）があるのをご存じだろうか。

JGAの団旗ができたのは1938（昭和13）年、日本体育協会の主催で『国民精神作興国民大会』が行われた時だった。深紅の布地に金色の大鵬がボールを銜え、勇壮に飛び立とうとしている図案である。大鵬はひと飛び9万里という空想の動物だ。この催しには当時、体育協会加盟の27団体が参加して、日比谷から九段にかけて5千人のアスリートが勇壮に行進した。ゴルフ協会はこの年、体育協会に加盟したばかりで、旗手はプロゴルファーの浅見緑蔵が務めた、

2度目のお披露目は1959（昭和34）年、皇太子（上皇さま）ご成婚記念スポーツ祭のパレードだった。この日は生憎の雨で、会場は国立競技場から急遽、千駄ヶ谷の東京都体育館に変更され、日本ゴルフ協会役員の小寺酉二、細川護貞らが元気に行進した。旗手は石本喜義（前年日本アマチャンピオン）が務めた。

3度目は、東京オリンピック翌年の1965（昭和40）年10月10日。国立競技場で行われた『体育の日』制定記念パレードに参加した時。旗手は学生ゴルファー中川好正が務めた。陸上や水泳、ラグビーなどの協会と肩を並べてJGAからは関東学生ゴルフ連盟の男女学生が元気よく行進した。東京オリンピックといえば思い出されるのは開会式。雲一つない秋晴れに恵まれ、開会の模様を伝えるNHKのアナウンサーは『世界中の青空を東京に集めたような秋晴れです』とアナウンスした。

この団旗は戦時中、東京ゴルフ倶楽部の倉庫に保管されていた。1954（昭和29）年のある日、眠っていた旗が見つかり戦争の苦しい時代をよく生き延びたとゴルフ界の話題になった。



《写真》
「体育の日」制定を記念したスポーツ行進に参加したJGA団旗

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（22）

【チャイナドレスがお似合いのチャンピオン】

日本の女子アマチュアゴルフの女王を決める日本女子アマゴルフ選手権は1959（昭和34）年から始まった。それ以前の女性の大会は、毎日新聞と報知新聞社が開催を支援した関東の女子倶楽部（関東の女子ゴルファーの同好会）の競技くらいしかなかったが、カナダカップの日本開催以降女子ゴルファーが増えたこともあり、同年、日本ゴルフ協会（JGA）主催で日本選手権が創設された。国内ばかりではなく、ハワイや在日米軍の将校らも参加し、67人の婦人ゴルファーたちが2日間54ホールストロークプレーで争った。コースは野村駿吉が理事長を務める東京ゴルフ倶楽部で、第1日はハワイのE・ジャコラが123打でトップに立ち、最終日もそのまま逃げ切り、通算249打で初代のチャンピオンに輝いた。日本勢で一人気を吐いたのは横河初子。体格のよい陸軍大佐のアミジッヒと2、3位を争うプレーオフを制して2位の座を確保した。

競技終了後、参加選手は思い思いの服装で表彰式に出席したが、一際、目を引いたのはチャンピオンに輝いたジャコラのチャイナドレスだった。緑のドレス姿に取材各社のカメラマンは一瞬、シャッターを切るのを忘れるほどで、さながらハリウッド映画の『香港』で主役を演じたジェニファー・ジョーンズのようだった。

《写真》
優勝カップを手にするジャコラさんとプレゼンターの野村JGA副会長

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（23）

【チャイナドレスがお似合いのチャンピオン】

安部前総理は在任中、トランプ米大統領と友好を深めた“ゴルフ外交”は有名だが、ゴルフ外交といえば安部前総理の祖父に当たる岸信介56代総理も1957（昭和32）年6月、総理就任後に日米首脳会談でアイゼンハワー米大統領とワシントン郊外のコースでゴルフ外交を展開したのは広く知られている。

日本の政界では伊藤博文以来、99代に及ぶ総理大臣が出ているが、ゴルフを趣味として生涯クラブを振った総理は多い。そこでゴルフの腕前は？と調べてみたら、52代の鳩山一郎が実力ナンバー1のようだ。ホームコースは東京ゴルフ倶楽部。日本アマチュア選手権、アマチュア東西対抗に出場し、シングルハンディの腕前だった。

64代の田中角栄も大の愛好家でアメリカの人気プロだったジャック・ニクラウスにも挑戦した。小金井CCがホームコースで、プレー中は『まあ～その～』と例の塩辛声でよくキャディーに声をかけていた。

池田、福田、大平、鈴木、中曽根、細川、森の歴代総理らも、クラブを振ったが、多忙な公務の寸暇を割いて健康保持のためのものだったようだ。

79代の細川護熙は東京ゴルフ倶楽部の会員だったが、ゴルフより焼き物に熱を上げた。父君の護貞はアマチュアゴルファーの実力者として知られ、日本ゴルフ協会の会長を務めた。

92代の麻生太郎も伝統ある東京ゴルフ倶楽部の会員で、来場は稀ながら「キャディーにジョークを飛ばすほど気さくな方」と、従業員の間では人気者だ。1948（昭和23）年、47代の芦田均がクラブを振っていた。と知る人は少ないようだが、ゴルフ愛好者の一人だった。

《写真》
芦田均元総理のプレーぶり

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（24）

【実力ナンバーワンは鳩山一郎】

日本の内閣総理大臣は初代の伊藤博文以下、先日就任した菅総理が99代目になるが、歴代総理の中にはゴルフ愛好家が沢山いる。この中で腕前の実力者は鳩山一郎（52代）になりそうだ。

鳩山は1935（昭和10）年、アマチュアの東西対抗競技（茨木カンツリー倶楽部）に東軍のメンバーとして、ダブルスとシングルスに出場している。成績は、ダブルスは引き分け。シングルスは敗戦。しかし、黒星を喫したとはいえ東西対抗の代表に選ばれるということは、トップクラスの実力者たる証拠だ。

翌1936（昭和11）年には日本アマチュア選手権（我孫子ゴルフ倶楽部）に出場しているが、残念ながら36ホールの予選で188（98・90）を叩いて予選突破はならなかった。文部大臣の要職を退いてからのことだ。

米国の人気プロのジャック・ニクラウスに挑戦したのは田中角栄（64代）だった。小金井カントリー倶楽部の会員としてホームコースで強豪ニクラウスにチャレンジした一幕はゴルフ界の話題になった。

先頃、退任した安倍晋三（96代）のゴルフは、トランプ米大統領とのゴルフ外交でしばしば話題になった。ゴルフ王国の米大統領とゴルフを通しての親善外交は、祖父（岸信介）に負けないゴルフ外交を成功させたといえる。安倍のゴルフはエネルギッシュではないが、良き同伴競技者といわれるような行儀のよさが印象に残る。歴代総理の中では優等生ゴルファーの一人に挙げられるのではないか。

《写真》
ゴルフの実力ナンバーワンといわれる
鳩山元総理のショット

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（25）

【ゴルフの日米対抗戦が実現】

1934（昭和9）年秋、野球の米大リーグ一行が日本にやって来た。メンバーの中にはホームラン王のベーブ・ルースがいた。さらに来日した関係者の中にバットメーカーの社長がいて、アメリカPGA（プロゴルフ協会）から日本のゴルフ協会に当てた親書を携えていた。中身はPGAのプロと日本のプロとの対抗戦をやらないか、という提案だった。これを受けた日本側は大谷光明（同副理事長）らの首脳陣が協議した結果、日米親善、ゴルフの普及にプラスになるとこの申し入れを受託し、翌1935（昭和10）年に6人のプロの派遣を決めた。

代表に選ばれた安田幸吉、宮本留吉、浅見緑蔵、中村兼吉、陳清水、戸田藤一郎のプロ6人に団長として加沼豊（程ヶ谷カントリー倶楽部支配人）らの一行だった。

4月に出発し、計12回の対抗戦が予定された。期間は約3か月にわたる大キャラバンだった。

遠征の契約条件は、往復の旅費（当時は飛行機ではなく、横浜からの船旅）は日本側で持つ。滞米中の旅費、宿泊費はアメリカ側。興行収入はアメリカ側とするという内容だった。

出発前、一行は東京ゴルフ倶楽部朝霞コースで合宿練習を重ねた。指導に当たったのは日本ゴルフ界の重鎮、赤星四郎、六郎の兄弟で、自宅に6人のプロを呼び寄せて西洋料理の食べ方、作法、特にスープの食べ方を指導した。代表一行のほとんどが西洋料理を口にしたことがない。「作法に落ち度があってはいけない」と出発前は作法の履修から始まった。

《写真》
日米対抗ゴルフを前に渡米する6人のプロを指導した赤星兄弟（左兄四郎、右弟六郎）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（26）

【日米対抗で、海を渡った6人のプロたち】

日米対抗ゴルフの日本代表に選ばれた6人は、渡米前の合宿練習を経て1935（昭和10）年の4月9日、安全祈願で明治神宮に参拝後、横浜港から日枝丸に乗船して太平洋を渡った。横浜の埠頭には赤星兄弟を始め、日本ゴルフ連盟の首脳陣が見送った。

一行は4月20日にバンクーバーに到着後、なまった体をほぐそうと街のコースでボールを打ったが、長旅のためか思うようなボールは打てなかったらしい。

上陸してからの移動手段は車だった。肝心の対抗戦は米国本土の西海岸でのコースを皮切りに12回の対戦が予定されていた。

いまの時代とは違い、広い国土を車で移動するのは骨だった。ある時、PGA（米プロゴルフ協会）のトーナメント・コーディネーターとして日本側の世話をしていたボブ・ハーローからこんな手紙が舞い込んだ。マイアミから次の都市に向かう途中のこと、山道で車が故障した。ラジエーターが焼けたそうで、乗っていた6人は谷底から水を箱詰めにしてリレー式に汲み上げた。おんぼろのバスを購入して移動した難行苦行の一端である。

しかし、代表6人はまとまりがよく、対抗戦は人気上々。入場料収入も予想以上となり、PGA側は気をよくして対抗戦を最初の約束を超える42回に追加した。対戦成績は日本側の42戦25勝13敗4引き分け。結局全土をくまなく回る大キャラバンになった。

この企画はアメリカ側の発案だが、将来はライダーカップ（プロゴルフの英米対抗マッチ）のように発展させたいという狙いがあったらしい。

《写真》
日本の6人のプロたち。
前列左から加沼豊団長、右へ中村兼吉、浅見緑蔵、
中列左から陳清水、宮本留吉、安田幸吉、
後列は戸田藤一郎

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（27）

【中村兼吉全米オープンでの快挙】

ゴルフの日米対抗戦戦で海を渡った6人は、42回に及ぶ対抗マッチで4か月という長期にわたり、見知らぬアメリカの主要都市をくまなく訪れた。対抗戦は勝ち越しの成績で、日本のゴルフの名声を高めた。地元の米国は延べ200人のメンバーを繰り出したとPGAが発表した。この中にはサム・スニードも、ボビー・ジョンズも含まれていたという。

80年以上も昔、アメリカのプロと渡り合い、勝利6割（25勝13敗）という成績は、高く評価されるべきだろう。また、6人のプロたちは道中、不平を漏らさすことなく、耐えたという。

一行はこの間、5つの選手権に出ているが、中村兼吉の全米オープン（ペンシルベーニア州オークモント）58位タイの成績は特筆ものだ。

この年の全米オープンは、23地区で予選を勝ち抜いた159人が出場した。日本の6人は予選免除で出場したが、中村兼吉だけがただ一人、前半の36ホールを通過、後半36ホールのプレーに進んだ。第3ラウンドを終え、43位タイまで順位を上げたが、最終ラウンドは崩れて58位タイ（通算325打）に終わった。USGA（米国ゴルフ協会）の記録には《KANEKICHI　NAKAMURA JAPAN,62・79・78・86》と記載されている。

この快挙にアメリカの放送局から「あなたはいつ、ゴルフを始めたか。」「今後、アメリカに留まる意思があるや。」とインタビューされ、加沼団長の通訳で中村の一世一代の声が全土に流れた。だが、中村の快挙はとうの昔の物語で、肝心の日本では忘れ去られている。

《写真》
1935年の全米オープン選手権に出場した6人のプロたち。左から3人目が中村兼吉（オークモントカントリークラブで）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（28）

【ホームラン王ルースのゴルフ】

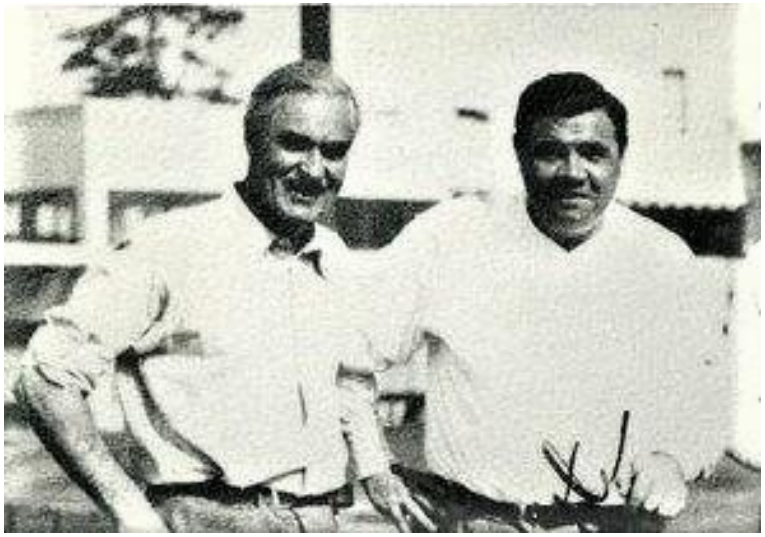
1934（昭和9）年秋、日本にやって来た米大リーグ一行の中に、ホームラン王のベーブ・ルースがいて、日本各地で大変な人気者になったと伝えられている。ルースの来日は、当初≪？≫だったらしい。

だが、当時の駐日米大使のジョセフ・グルーが、日米間の険悪な空気を和らげたいとルースの来日を強く希望し、来日が実現したということだ。試合の合間、グルー大使はルースを伴ってゴルフ場に姿を見せた。大使もルースもゴルフ好きで、東京ゴルフ倶楽部、藤沢ゴルフ倶楽部（今はない）を訪れてプレーしている。同伴競技者だった赤星四郎はルースのゴルフについてこう語っている。

『ホームラン王だからといって、驚くようなロングヒッターではない。ドライバーの飛距離はせいぜい250ヤードどまり。スライスが多く、バンカーにつかまった。だが、バンカーショットがうまく、確実にホールに寄せていた』と安定したプレーを褒めていた。

ルースは野球とゴルフの違いについて、こんな意見を持っていた。

『バッティングはフラットなスイング、ゴルフはすくい上げるスイング。動いているボールを打つベースボールと、止まっているボールを打つゴルフとはタイミングが違う。バッティングには目が大切だ。日本の野球選手には眼鏡をかけた選手がいるが、アメリカにはいない。投手は別だけど・・・』と目の大切さを強調していた。それから数年後のことだが、陳清水が米国に遠征した時、ルースは米西海岸での開かれたゴルフトーナメントに出場していたそうだ。ルースのゴルフは単に余興ではなく、本物の力を備えていた、と感心していた。



《写真》
ルースとグルー駐日米大使

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（29）

【ヘビー級世界チャンピオンのゴルフ】

太平洋戦争に敗れた日本に米軍が進駐したのは、1945（昭和20）年代のこと。

銀座の目抜き通りをジープが走り、リンゴの唄が流行して、日本は平和な時代に向かった。その頃からアメリカから著名なスポーツ選手や芸能人たちが日本を訪れた。日本に進駐している米軍兵士の慰問だった。ハリウッドの喜劇俳優ボブ・ホープもその一人だが、著名なプロゴルファーの来日は、ゴルフ王国らしかった。

1951（昭和26）年にはロイド・マングラム、ジャック・バークがやって来て程ヶ谷カントリー倶楽部、小金井カントリー倶楽部でプレーを披露した。この時ボクシングの世界ヘビー級チャンピオンだったジョー・ルイスが二人のプロに挟まれてプレーしている。

ルイス（1914～1981）は“褐色の爆撃機”というニックネームを持つヘビー級の世界チャンピオンで、11年間にわたって王座を守ったという無敵のボクサーだった。リングの外ではゴルフの名手としても知られ、アマチュアのゴルフ競技に出場している。

小金井カントリー倶楽部における3人のプレーには、観客に交じって軍服姿の米兵士の姿があった。観客の関心はルイスのプレーだった。世界一のハードパンチャーはボールを叩き潰すのでは・・・と妙なところに興味が注がれた。だが、ルイスは大きな体に似合わずソフトなスウィングの持ち主で、ゴルフは手堅さが身上だった。本業のボクシングでは腕自慢の兵士の挑戦を受けたが、ルイスの軽い一発で皆、ダウンを喫した。その一幕が当時のニュース映画で紹介された。

《写真》
1951年、小金井CCでプレーするマングラムとルイス（手前）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（30）

【礼節を重んじた戦前派のプロたち】

1957（昭和32）年夏。横浜市保土ヶ谷区にあった程ヶ谷カントリー倶楽部（現在は横浜国大キャンバス）で日本プロゴルフ選手権が開かれた。その頃はゴルフ場の数も少なく、全国で100倶楽部少々。日本ゴルフ協会に加盟している倶楽部数は関東が32、関西は15だった。協会が主催する競技は加盟倶楽部以外では開催しなかった。現在はゴルフ場の数も多く、競技会の開催を歓迎するゴルフ場は多い。しかし戦前からの倶楽部は、ゴルフ普及という大局的な立場からプロ競技のためにコースを解放した。

程ヶ谷カントリー倶楽部は日本初の18ホール完備のコースで、財界のお歴々が会員として名を連ねていて、会員間の作法やコース管理等が他の倶楽部に比較すると厳しかった。

この年の日本プロゴルフ選手権は64人が参加し、第1日は36ホールのストロークプレーで上位16人を選抜し、2日目からマッチプレーで争われた。予選はホームコースとなる小野光一と新井進が142打でタイ、小野光一がメダリスト（予選1位）になった。決勝は中村寅吉とマッチプレーが得意の栗原甲子男の争いになったが、コースを熟知している中村が初優勝を遂げ、小野光一とともにカナダカップ（その年秋、日本で開催）の代表に選ばれた。中村にとっては、いわばホームコースだ。かつてキャディーとして働いていたからお里帰りしたようなものだった。

競技後の表彰式は、名門倶楽部での開催ということもあって、礼節を重んじるプロの一面がうかがえた。参加者は全員背広姿に威儀を正して石井光次郎理事長の挨拶に耳を傾けた。最近は脱帽もせず、カップを受け取る輩もいる。ゴルフ作法の今昔の違いを語る一面だ。

《写真》
程ヶ谷CCにおける日本プロゴルフ選手権の表彰式の一コマ

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（31）

【 自動車の副賞をもらったプロ】

日本のゴルフ界では、いまプロのトーナメントが花盛りだ。賞金のほか、副賞に乗用車が提供されるのは珍しいことではない。プロの競技といえば1950（昭和25）年代は男子競技のみだった。そんな時代のプロゴルフの競技で脚光を浴びたのはマスコミが主催した大会だった。読売新聞社が100万円賞金のトーナメントを開き、キャッチフレーズは『ワンパット30万円のスリル』だった。優勝と2位の賞金差を誇張した言葉だった。次いで中日新聞の中部日本招待アマプロトーナメント（現在の中日クラウンズ）が生まれ、現在に至っている。ここで話題になったのは副賞の乗用車だった。

プロに贈った乗用車といえば、まず1957（昭和32）年の秋に霞ヶ関カンツリー倶楽部で開かれたカナダカップ。中村寅吉が個人、団体を制覇してゴルフ界は沸いた。そこで自動車メーカーの日産が中村にダットサンを贈った。乗用車の下半分は緑。上半分が黄色という色分けだった。中村は緑のスラックスに黄色い長袖のシャツがお気に入りで、メーカーはその色分けに着目したのだ。

中村は車をもらってから運転免許を取得した。月例競技会には車で出かけた。すれ違いにくい細い道で、対向車のドライバーに『俺は中村寅吉だ。運転は素人だから。俺の車を動かしてくれないか』と事故防止に神経を優先していた。

トヨタが協賛している中日クラウンズは、優勝賞金のほかに副賞に小型乗用車を提供した。初めて手にしたのは富戸出身プロ石井朝夫だった。石井は自動車の免許取得が早く、運転が好きだった。おまけにスピードの出る車が好みらしく、すぐ馬力の強い車に買い替えたそうだ。

《写真》
副賞の乗用車を受けた石井朝夫
～中日クラウンズ

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（32）

【川奈で味わった駅弁の味】

関東地区のプロゴルファーを統括する組織として、『関東プロゴルフ協会』があった。協会は1931（昭和6）年、赤星四郎の発案で設立された。同じ時期には関西地区に同様の『関西プロゴルフ協会』があり、その地区のゴルフ場に所属するプロゴルファーが加盟していた。

この両組織は、プロを統括すると同時に、毎月それぞれの地区で36ホールの月例競技を開催していた。その成績は日本ゴルフ協会や関東、関西の連盟が主催する各オープン選手権への出場資格を決める参考材料になっていた。

関東地区では川奈にある川奈ホテルのコースが、年度初めの開催コースになっていた。伊豆地方は春の訪れが早く、この時期になると関東のプロたちが競技会に備えて熱海や伊東に集結した。

月例競技は川奈ホテルの大島、富士両コースが使われた。出場するプロたちは熱海や伊東の駅で駅弁を買い求めてコース入りしていた。ホテルでの食事は高価で手が出ない、ということから手頃な駅弁が好まれたようだ。

競技は36ホールのプレーだったため、前後半の中間に食事をしなければならない。プロたちはコースのあちこちに散って駅弁で空腹を満たした。東京在住の古いプロは『よく余分に買って土産にしたものだ。うまかったという思い出が残るよ』と駅弁の乙な味を忘れていない。

最近は東京都内のデパートやマーケットでも地方の名物食材を生かした駅弁が売り場に並んでいる。家庭においても、ゴルフ場においても、駅弁という日本の食文化は、味よし、食材よし、尚かつ値段も手頃と好まれているようだ。

《写真》
川奈ホテルのハウスとコース

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（33）

【『よーォ　おめーが先に打てよ』】

1961（昭和36）年の春のこと。ベルギーの第4代国王レオポルド三世陛下が来日された時の話である。ゴルフ愛好家の陛下が、当時飛ぶ鳥を落とさんばかりの勢いだった中村寅吉に挑戦するという貴重なドラマがあった。

中村はその四年前、カナダカップで日本の初優勝に貢献したスーパースターだった。マスターズトーナメントにも出場するなど、世界のゴルフ界から注目される存在だった。レオポルド三世は、フィリップ第7代現国王の祖父に当たる方だ。ベルギーはヨーロッパの中では小さな国だが、英国をしのぐほどのゴルフ愛好国で1888（明治21）年にはロイヤルアントワープゴルフという倶楽部が創設され、1910（明治43）年にはベルギーオープンゴルフ選手権が始まっている。

そんなベルギーだから、王族のゴルフの腕前も確か。来日前から『日本でカナダカップ優勝経験のある中村にぜひ挑戦したい』という夢を持っていたそうだ。

この挑戦は3月の早春に実現した。場所は千葉県の鷹之台カンツリー倶楽部。陛下は、倶楽部役員との記念撮影を終えると1番のティーに向かわれた。迎え撃つ中村は早朝から練習ボールを打ち準備万端。一足早く1番のティーで陛下をお迎えした。そして『よーォ。アマチュアのおめーが先に打てよ』と声をかけた。すると陛下は日本語が分かろうはずもなく、ご機嫌麗しく、会釈して第一打を放った。このやり取りを見ていた外務省や大使館の職員はハラハラ、ドキドキ。

陛下は念願かなって世界の王者とのプレーを楽しまれ、コースを後にされた。中村は『俺はアマチュアに敬意を表したまでよ』といつもの寅さんスマイルで無事大役を果たした。

《写真》
プレー中のベルギー第4代国王のショットを見守る中村（右）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（34）

【プロのハンディキャップ制度】

1957（昭和32）年に日本プロゴルフ協会が誕生して全国のプロを統括する機関となったが、それ以前は関東、関西にプロ協会があり、個別に活動をしていた。ともに昭和ひと桁時代の発足で、日本ゴルフの先達がプロのレベル向上を図る目的で活動していた。

プロ組織の誕生は関西が一足早く（関西はプロゴルフ研究会で発足）、1928（昭和3）年だった。関東は1931（昭和6）年に創設され、その年の7月には関東プロ選手権（程ヶ谷カントリー倶楽部）が開催された。

関東の組織設立に骨折ったのは赤星四郎や石井光次郎だった。

そこにはこんな裏事情があった。『1927（昭和2）年創始のゴルファーナンバーワンを決める「日本オープン選手権」。第1回はアマチュアの赤星六郎が優勝しているが、第3、4回と関西の宮本留吉が連続優勝を遂げて日本のゴルフ界に関西勢強しという印象を与えていた。そこで関東を代表するゴルファーの赤星四郎が、打倒関西を念頭に、関東プロ協会を立ちあげ、月例競技開催を働きかけたのだ。』

プロの月例競技は、今日、行われていない。だが当時は、東西のプロ協会主催で毎月開催されていた。その成績から算出したハンディキャップや平均打数が日本オープンや日本プロの選手権出場資格要件になっていた。

そのハンディキャップは日本オープンや日本プロの選手権優勝経験者（宮本留吉、浅見緑蔵ら）は0。東西地区のプロ、オープンの選手権勝者は1。といった具合に0から5まであった。競技はグロスとネットで争われていた。

ハンディキャップ制度はアマチュアのみではなく、戦前戦後にはプロの協会にも適用されていた。

関東プロフェッショナル ゴルファース

ハンディキャップリスト　昭和十四年三月現在

0

浅見緑蔵（程ヶ谷）　陳 清水（武蔵野）　藤井武人（霞ヶ関）
岩倉米吉（藤沢）　小池園義代（霞ヶ関）　林 満福（東京）
安田幸吉（東京）

1

菱智恭次（霞ヶ関）　程 国秋（霞ヶ関）　川井武作（藤沢）
村上義一（川奈）　中村実吉（程ヶ谷）

2

井上清次（相模）　小野寺義一（藤沢）　国分 恒（千葉）
向 国吉（武蔵野）　島川行正（相模）　田畑英次（武蔵野）
[illegible]（鷹之台）　鈴木源次郎（程ヶ谷）　山本清次郎（武蔵野）

3

岩崎正人（川越村）　加藤豊吉（相模）　飯村回蔵（武蔵野）

4

峰石一郎（鷹之台）　花島 洋（鷹之台）　伊藤俊夫（藤沢）
村上英武（川奈）　浜崎利一（赤羽）　大沢滝太郎（霞ヶ関）
和田利夫（鷹之台）

5

[illegible]（武蔵野村）　栗山春吉（藤沢）　近藤利夫（霞ヶ関）
[illegible]（小金井）　百木輝夫（藤沢）　村田勝作（程ヶ谷）
生駒清人（武蔵野）　清水喜一郎（武蔵野）　前田二郎（程ヶ谷）
[illegible]（程ヶ谷）　[illegible]（川崎）　鈴木李作（川崎）
鈴木正作（東京）　八木在蔵（藤沢）

昭和十四年三月廿日

関東職業ゴルファース協会

《写真》
昭和14年の関東プロのハンディキャップ一覧表

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（35）

【昭和天皇のゴルフィング1】

昭和天皇は明治、大正、昭和と激動の時代を歩まれて在位は60年に及んだ。ご公務の余暇には海洋生物や植物の分類研究を続けてこられた。著書も多数あり、国民には《科学者天皇》という印象が強かった。

一方、スポーツの分野では、日本のゴルフ界における草創期からのゴルファーだった。

昭和天皇のゴルフとの出会いは1917（大正6）年に遡る。16歳の皇太子時代に、侍従や傳育官の手ほどきを受けながら赤坂離宮でボールをお打ちになられた。翌年には箱根の仙石で初めてコースを回られた。だが思うようにボールには当たらず、飛ばずで、半べそをかきながらコースを回られたそうだ

そこで、ゴルフが上達するよう、沼津の御用邸近くの鈴川海岸に練習用のコースが造られた。ここで何度か練習をされたそうで、その記念碑（皇太子殿下御散策の跡）がこの地に残されている。

昭和天皇は、1921（大正10）年に欧州各国を歴訪、摂政宮就任。その後、ご結婚や天皇即位という多忙な毎日を送られたが、その間も、最も愛したスポーツはやはりゴルフだった。

1922（大正11）年には英国の皇太子が来訪され、東京・駒沢にあった東京ゴルフ倶楽部のコースで日英皇太子による親善マッチが行われた。

昭和天皇は1917（大正6）年にゴルフと出会った。そして、1939（昭和14）年38歳の時、那須の御用邸のコースでプレーなさったのを最後に、ゴルフバッグを封印なさった。その間22年にわたり、昭和天皇のおそばにゴルフがあった。

《写真》
鈴川の近くに残る天皇がお越しになった記念碑

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（36）

【昭和天皇のゴルフィング2　新宿御苑のゴルフコース】

東京・新宿にある新宿御苑の広い敷地は、かつて長野・高遠藩のお殿様だった内藤家の用地だった。明治時代の廃藩置県で、内藤家から国に返還され、その後、農業振興のための内藤新宿試験場になり、1906（明治39）年に新宿御苑として皇室庭園になった。そして大正時代、御苑内に9ホールのゴルフコース（設計は大谷光明）が誕生した。昭和天皇が皇太子の頃、ゴルフを始められたのを機に設けられ、その後、皇后さまともお揃いでプレーを楽しまれている。

日本の皇室は、英国を範としてゴルフを採り入れていたので、昭和天皇をはじめご兄弟の秩父宮、高松宮もゴルフをなさった。

新宿門から入場して前方を見渡すと周囲は立木に囲まれ、ゆるやかな下り坂になっているため、ゴルフコースだったことが容易に想像できる。

昭和天皇は箱根の仙石や東京・駒沢にあった東京ゴルフ倶楽部でもプレーをなさったが、宮内省は一般のゴルファーとの接触を避けながら、もっとゴルフに親しんで頂こうと、新宿御苑に9ホールの皇室専用コースを造った。しかし、日本は太平洋戦争に突入してスポーツどころでない時代に陥り、米軍の空襲で御苑内の建物も被害に遭った。かつてのゴルフコースは消えたが、新宿御苑は現在、四季折々の花木を楽しむことができる「国民公園」として東京のオアシスとなっている。

以前、御苑内の池でゴルフボールが発見されたことがあり、どなたのものか不明のまま事務所に保存されている。昭和天皇のものという声もある・・・。

かつてゴルフコースがあったことを思い起こさせるエピソードだ。

《写真》
新宿御苑の新宿門からの風景

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（37）

【昭和天皇のゴルフィング3
欧州の旅の際、プロの模範プレーをご覧になる】

昭和天皇は皇太子時代の1921（大正10）年の春、欧州各国訪問の旅に出られた。今日とは違い、航空機はなく日本海軍の戦艦に乗船されて長い船旅を経験なさった。日本を出発されてセイロン（スリランカ）に立ち寄られ、現地のコースでプレーされたが、船上ではデッキゴルフを満喫されている。英国ではロンドン郊外にあるザ・アディントンゴルフクラブで、イギリスのプロによる模範プレーをご覧になった。

この模範プレー見学のお膳立てをしたのは、関西を代表するゴルファーの高畑誠一（日商株式会社［現・双日］元会長）だった。当時、貿易商鈴木商店のロンドン駐在員で、関西の名門である廣野ゴルフ倶楽部の創設に関わった中心人物として知られた人だ。

高畑は晩年、園遊会に招かれた際、昭和天皇との会話の機会に恵まれ、ロンドンでのプロの模範プレー見学のことを持ち出した。すると陛下は『よく、覚えています』とお答えになったそうだ。

天皇はこの欧州訪問でこの他、パリ郊外でもプレーされている。

昭和天皇のゴルフについては、周囲からの制約もあり、ご随意にプレーなさる機会は少なかったようだ。しかしご結婚後は皇后さまと新宿御苑の皇室専用のコースをよくお回りになられている。腕前は皇后さまの方がいいスコアをお出しになった、という記録が御苑に残されている。お揃いでお出かけになられ、プレーの後は御苑で採れた野菜をお土産になさるのも楽しみの一つだったそうだ。

《写真》
大正10年、英国のロンドン郊外のザ・アディントンゴルフ倶楽部で英国のプロの模範プレーをご覧になった

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（38）

【昭和天皇のゴルフィング4　日英皇太子の親善ゴルフ】

1922（大正11）年、4月19日のこと。日英皇太子による親善ゴルフが東京・駒沢にあった東京ゴルフ倶楽部のコースで行われた。日本の皇太子（昭和天皇）と英国のプリンス・オブ・ウェールズ殿下（エドワード8世）が9ホールのマッチを楽しまれた。

競技は日本側が大谷光明（日本ゴルフ元会長）、英国側はハルゼー随員がそれぞれの皇太子のパートナーを務めた。

プレーは当初、9ホールの2ボールフォーサム（同じサイドが交互にボールを打つ競技方法）が予定されていたが、英国の皇太子の要望で短時間に沢山楽しみたいということから競技方法は4ボール（それぞれが自分のボールを打ち、よいスコアを採用）のベストマッチに変更された。

さて、プレー当日のコース周辺の警備は、倶楽部の申し入れで制服の警察官の立ち入りを断り、会員が各ホールに2人ずつ配置されて警護に当たった。

プレーは日本側が第1打を打たれたが「チョロ（この時、王者空振り。という名表現が生まれた）」で、英国側が1アップ。2番は引き分け。3番で英国の2アップ。4番は日本がアップしたが、結局、英国が1アップで勝利。競技後、両皇太子ともご機嫌麗しく倶楽部会員との記念写真撮影に応じられた。英国の皇太子は葉巻を揺るがせながら『エンジョイした。リンクスも見事だ』とお褒めの言葉を残し、次の訪問地日光に向かわれた。

この日、英国皇太子のキャディーを務めたのは西園寺八郎（貴族院議員・宮内省では皇太子時代の昭和天皇補佐官）の子息『公一』さん。日本の皇太子のキャディーは高木喜寛（医学者・貴族院議員）の子息『秀寛』さんだった。

《写真》
日英皇太子による親善ゴルフマッチにおける英国皇太子のショット

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（39）

【昭和天皇のゴルフィング5　ウィンザー公の日本の思い出】

1921（大正10）年、昭和天皇は欧州訪問の旅に出られて欧州各国を親善訪問された。その翌年、英国の皇太子エドワード8世がその答礼として来日され、両国の皇太子は東京の駒沢にあった東京ゴルフ倶楽部でゴルフを楽しまれた。

エドワード8世（退位後ウィンザー公爵。以下、ウィンザー公）は『王冠を捨てた恋』で知られるが、離婚歴のあるアメリカ人の女性シンプソンさんと恋に落ち、結婚のために在位僅か1年足らずで王位を捨てた。

さて、1964（昭和39）年のこと。世界女子アマチュアチーム選手権という競技がフランスのパリ郊外にある名門ゴルフ倶楽部サンノン・ラ・ブルテッシュで開かれた。この時、パリにご滞在のウィンザー公が観戦された。公は大のゴルフ好きで、日本チームを見かけると声をかけた。日本チームは小坂旦子、泉谷珠子、松波紘子のメンバーで出場していた。小坂は信越化学社長・小坂徳三郎夫人、泉谷珠子は大阪・泉谷という料亭のお嬢さん。松波は女子プロで活躍した服部道子のお母さん。三者とも日本女子アマチュアゴルフ選手権の優勝経験者だった。

競技を終えたところにウィンザー公は、『昔のことだが、日本を訪問したことが懐かしい思い出だ』と対応した小坂夫人に42年前の日本訪問のことを語りかけてきた。当時の皇太子（昭和天皇）とゴルフを楽しまれた思い出話に花を咲かせながら小坂夫人と固く握手を交わした。この当時の写真を見た小坂夫人は『恥ずかしい。高貴な方とのご挨拶なのに、私の方が頭が高くて・・・』と語っていた。

ウィンザー公は1972（昭和47）年、77歳で他界された。

《写真》
ウィンザー公と握手を交わす小坂夫人

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（40）

【開場セレモニーで大役を果たした宮様方】

1957（昭和32）年、日本で初めてのゴルフ国際競技『カナダカップ』が開かれ、テレビで実況中継された。それまでゴルフといえは、高貴な方々やお金持ちが楽しむものと思われていたが、このお陰で庶民はゴルフというスポーツを広く知った。この『カナダカップ』が開催されて以後の3～5年間は、日本各地でゴルフ場の建設が相次ぎ、建設会社、鉄道会社、証券会社などが新しい事業としてゴルフ場建設に乗り出した。日本経済の好況が後押ししたのは言うまでもないが、ゴルフ場を建設し、会員を募集すると会員の集まりがよかったからでもあった。

いざ、ゴルフ場が完成すると親会社は盛大に開場記念行事を実施した。テープカットや初打ちが主な行事の中身だったが、その主役として高貴な方が招かれていた。古くは、1932（昭和7）年、東京ゴルフ倶楽部は、倶楽部の総裁だった朝香宮が始球式の主役を務めた。戦後も殿下は始球式に再三登場した。そればかりでなく、殿下はゴルフの腕前も確かだった。ハンディキャップは一桁で、日本アマチュア選手権の出場も考慮なさったとか。ゴルフは昭和天皇の勧めで振り始め、実力は皇族方の中でナンバーワンといわれた。

ついでゴルフがお好きだったのは高松宮。妃殿下とおそろいで始球式にお出になっている。戦前には多くの宮家の方々がクラブを振っておられるが、朝香宮、常陸宮ご夫妻はご縁のあるゴルフ倶楽部競技に優勝カップを提供なさっている。アマチュア競技にはかつて東西対抗があり、勝ったチームには三宮殿（朝香、東久邇、李王）下賜のトロフィーが与えられた。だが、この競技は1970（昭和45）年を最後に姿を消した。

《写真》
皇族方の中で実力ナンバーワンといわれた朝香宮

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（41）

【寅さんはマッチプレーが苦手】

1957（昭和32）年のカナダカップで、日本初優勝の立役者である《寅さん》こと中村寅吉は、ストロークプレーは得意だが、マッチプレーは苦手だった。競技方法がストロークプレーだった関東オープン選手権では無敵の強さを誇ったが、日本プロゴルフ選手権のようにストロークプレー後、マッチプレーの勝ち抜き戦になると格下の相手に、いとも簡単に敗れることがしばしばだった。

1957（昭和32）年、日本で行われた『カナダカップ』は団体戦で、競技方法は、寅さん得意なストロークプレーだったから勝運に恵まれたといえよう。

マッチプレーといえば、先日、松山英樹が健闘した米国のプロゴルフ選手権。マッチプレーだと人気者が必ずしも勝つとは限らない。人気者が敗退すると入場収入に影響するということから、米国のプロ協会は、1916（大正5）年の創始から続いたマッチプレーを1957（昭和32）年に廃止してストロークプレーに切り替えた。日本プロゴルフ選手権も同様。マッチプレーで優勝を争っていたが、1961（昭和36）年からストロークプレーに変わった。中村にとってのプロゴルフ選手権はストロークプレーになってからの優勝は一度のみだが、マッチプレー時代に三度優勝を経験している。

中村は苦手のマッチプレーについて『俺がマッチプレーに弱いのは、相手の顔を見ながらプレーするからだな。気になるから精神統一が疎かになり、いつも負けていた。相手の顔を見るのではなく、コースを見ながらプレーすべしと感じたよ。俺は気が弱いから、相手の存在が気になるものナ』と語っている。これぞ中村が辿りついたマッチプレーを勝ち抜く極意だろうか。

《写真》
昭和26年の関東オープンで二度目の優勝を遂げた中村寅吉
（中央でトロフィーを持つ）～小金井カントリー倶楽部で

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（42）

【ゴルフ東西対抗に三宮殿下杯】

日本のスポーツがまだ発展途上にあった時代、各種スポーツ大会には「東西対抗」という地域の対抗戦がつきものだった。対抗戦は日本列島のほぼ中心部に当たる静岡を中心点にして、列島を東と西に分けて両地域の代表が自分の地域の名誉にかけて戦った。その主な目的は東西の交流、融和、技術情報の交換などだった。

ゴルフにはプロ、アマチュアにそれぞれ「東西対抗」があった。とりわけアマチュアでは、勝利チームに三宮殿下下賜のトロフィーが贈られた。三宮家とは東久邇宮、朝香宮、李の各宮家のことで、それぞれの宮様はゴルフがお好きだったことから、ゴルフの振興を促すことを狙って、カップのご下賜を仰いだ。

近年はいずれのスポーツとも、「東西対抗」などほとんど話題にならない。交通機関の発達により、関東と関西間の距離が近くなり、数時間もあれば目的地にたどり着ける。だが、その昔は夜行列車を利用して一泊という長旅だった。東西間の旅の時間が縮まったことが東西対抗戦を遠ざけた原因だろうか。最近、将棋に東西対抗が登場することになり、話題になっている。

プロ野球の「東西対抗」は、戦後ほどなくして開かれた。東軍は巨人軍、西軍は阪神が中心になり、東軍は背中に『E』 西軍は『W』 のマークを付けて戦った。

ゴルフの「東西対抗」は1927（昭和2）年から1970（昭和45）年まで行われていたが、代表人選のトラブルからこの年をもって廃止された。

その間、関東の20勝12敗3引き分け。アマチュアの英米対抗のウォーカーカップを範として創設されたゲームだった。

《写真》
東西対抗に下賜された三宮殿下杯

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（43）

【人糞撒いて接収を阻止した臭い話】

1931（昭和6）年開場の相模カンツリー倶楽部（神奈川県大和市）は小田急江ノ島線中央林間駅から徒歩で数十分という18ホール完備の会員制倶楽部だ。過去、日本ゴルフ協会、関東ゴルフ連盟が主催する幾多の競技会場になっている。会員は戦前からの一流企業のビジネスマンや腕達者な女子ゴルファーが名を連ねていて、会員の中から日本のアマチュアゴルフ界を代表する名手を輩出している。所在地が最寄りの駅から近いこともあり、電車を利用してコース通いをする会員が多く、プレー後の談笑は他倶楽部に見られない和やかさがあるようだ。

コースは名ゴルファー赤星六郎の設計によるもので、フラットな地形ながらホールは松などの立ち木に囲まれていて、何度プレーしても飽きない味がある。

戦前から長い歴史を積み重ねてきた倶楽部だが、終戦後に日本に進駐した米軍に接収しかけた時、倶楽部役員をしていた古い会員のとっさの妙案で、接収を免れたというエピソードがある。

倶楽部の近くには連合国軍最高司令官マッカーサー元帥が舞い降りた厚木飛行場や米軍のキャンプ地になった座間があり、米軍は早くから接収を目論んでいた。ところがゴルフ場側には思わぬ接収阻止の武器（？）があった。強力な武器になったのは人糞である。日本では戦前、戦時中にかかわらず、作物を育てる際、畑に人糞を撒いたが、相模カンツリー倶楽部では芝を育てるためコースに人糞を散布していた。米軍が視察に来た時、香ばしい香りが充満していたそうで、これには無敵誇る米軍もお手上げ。お陰で接収を免れた。そのため、1940年代から50年代にかけて復活した公式競技が開催できた。

《写真》
赤星六郎設計の名コースといわれる
相模カンツリー倶楽部

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（44）

【知られざる赤星六郎快挙】

名ゴルファー赤星六郎（1898～1944）は、薩摩藩郷士の赤星弥之助を父に、10人兄弟の6番目として育った。父は明治維新前、五代友厚（大阪商工会議所初代会頭）とともにヨーロッパを旅して見分を広めている。その折、英国の兵器メーカーであるアームストロング社から大砲のパテントを手に入れ、日清、日露戦争で政府に大砲を売り込み巨万の富を築いたといわれるが、50歳の若さで他界した。五男の五郎を除く男子4人をアメリカに留学させ『親が死んでも大学を卒業するまでは、帰るべからず』と猛烈遺言を残している。

兄弟は皆、運動神経に恵まれ、のちにゴルフ場設計家となった四男の四郎は大学でアメリカンフットボールの選手だった。だが、六郎は幼少期から体が丈夫ではなかったので、激しい運動を避けてゴルフを手掛けた。

1924（大正13）年のこと。大学ゴルフ部の合宿遠征でパインハーストに出向いた際、同地でスプリングトーナメントが開かれていた。そこで監督から『出てみないか』と勧められて出場した。六郎は『いつ負けてもいい』という気楽な気持ちでプレーしていたところ勝ち進み、予期せぬ優勝をものにして、「赤星旋風」が巻き起こった。ところがこの快挙は当初、日本には伝わらなかった。翌年、六郎が帰国して明らかにしたが、日本のゴルフ界には知られざる快挙だった。

1967（昭和42）年11月、世界シニア競技がパインハーストで行われた際、日本代表として出場した鍋島直泰（1907～1981）が、地元新聞社に依頼して当時の新聞を取り寄せた。すると紙面には「赤星の快挙」が、詳細に報じられていた。かくして六郎の快挙は43年目にして弟子によって確証を得た。が、六郎にとっては『どうでもいい』とのことだったらしい。

The PINEHURST OUTLOOK

A New Star in Golf World

《写真》
写真・赤星の快挙を報じたパインハーストの地元紙の一ページ

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（45）

【プレゼンターに女優さん】

関東ゴルフ連盟が主催するアマチュア競技会、関東女子選手権は、数ある女子のゴルフ競技の中では歴史も古く、女子ゴルフの普及には計り知れない貢献がある。創始は1955（昭和30）年、当初は奥様方のゴルフ大会だったが、創始2年目には映画女優だったゴルファーが勝ち、次いでOL経験者、さらに女子学生が優勝して大会は充実してきた。

至近は女子高校生が優勝するなど、女子ゴルファーの層の広がりが顕著だ。

この競技が創始されて間もない1956（昭和31）年のこと。映画女優だった荒川さつきが奥様ゴルファーを破って優勝した時は新聞の運動面に大きな見出しで報じられ、ゴルフ界では大きな話題になった。それから半世紀の時が流れて、かつてカップを手にした元女優さんが、今度はプレゼンターとして登場した。2010年、大会が開かれたのは神奈川県の相模カンツリー倶楽部。優勝は当時、茨城県の高校生だった照山亜寿美（現在はプロ）で、新進気鋭の照山は高校生とは思えない冷静なプレーでボールの転がりが速い高速グリーンを乗り切って初の栄冠を手にした。

そこで関東ゴルフ連盟は表彰式での優勝カップのプレゼンターに同倶楽部の会員だった荒川を選んだ。荒川は戦後間もなく、ミス鎌倉カーニバルに選ばれ、鎌倉在住の文士、久米正雄らの推薦で大映の女優になり20本以上の映画に出演している。荒川は80歳を過ぎていたが、会員になっているゴルフ倶楽部通いを習慣としていた。照山にカップを手渡した荒川は『50年前に頂いたカップを、時を経て私が渡す側になるなんてまるで夢のようです』と和らいだ表情で語りかけていた。

《写真》
優勝した照山に優勝杯を渡す荒川(左)。優しく祝福の言葉を送っていた

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（46）

【ゴルフ倶楽部の歌】

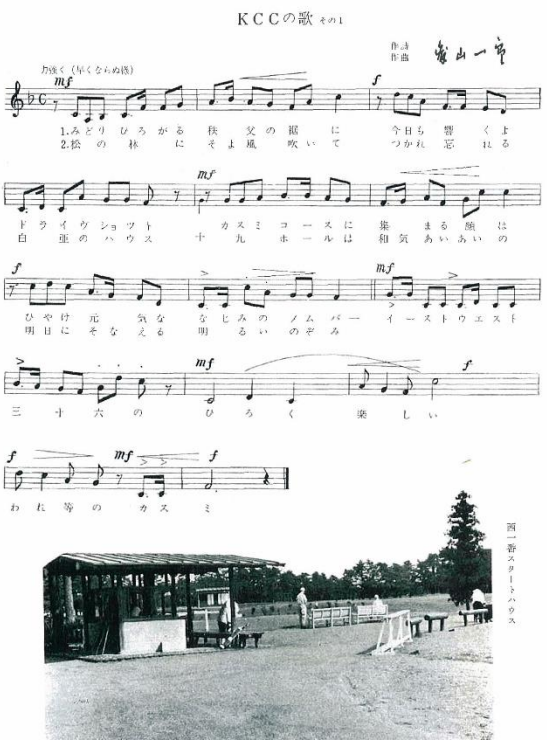
世界のそれぞれの国には、国威高揚、その民族的な存在感を象徴するような国歌がある。同じように戦前に創設された会員制のゴルフ倶楽部にも「倶楽部の歌」があった。古くは1913（大正2）年創設の東京ゴルフ倶楽部（現在は埼玉県狭山市）には『駒沢の歌』があった。

その東京ゴルフ倶楽部の隣には、霞ケ関カンツリー倶楽部があり、コースは隣り合わせだが、この地域においては東京ゴルフ倶楽部より霞ケ関カンツリー倶楽部の方が古くから存在する。この倶楽部も歴史は古く、36ホールを備え、かつてゴルフの国際競技である『カナダカップ』の舞台になった。今年は東京オリンピックのゴルフ競技の会場だが、この倶楽部の会員だった歌手の藤山一郎作詞、作曲による『KCC（霞ケ関カンツリー倶楽部）の歌』がある。

東京ゴルフ倶楽部の歌は1928（昭和3）年に披露された。その年に同倶楽部で東西対抗競技が行われ、この時、会員だった岡庄五が、日本ビクターに依頼して曲を作らせたものだ。

作詞は音羽時雨、作曲は佐々紅華。レコード盤になって残されていないが、競技に出場する会員の応援歌だったようだ。

さらに倶楽部の誕生は前記の二倶楽部より新しいが、同じ埼玉県にある飯能ゴルフクラブには作詞・星野哲郎。サトウ新一作曲による『飯能ゴルフクラブの歌』がある。ハウス内の食堂で出される割り箸の袋に詩が印刷されていた。このように学校、市町村、スポーツの組織などにはそれぞれの応援歌を持っているところが多く、演奏されるたびに感動を覚えるものだ。ゴルフ場の歌はかつてクラブハウス内でBGMとして流されていた倶楽部もあったが、ゴルフは静かな環境で楽しむスポーツだから、会員間で倶楽部の歌を話題にすることは稀だった。



《写真》
「KCCの歌」の譜面

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（47）

【ワンパット10万円のスリル】

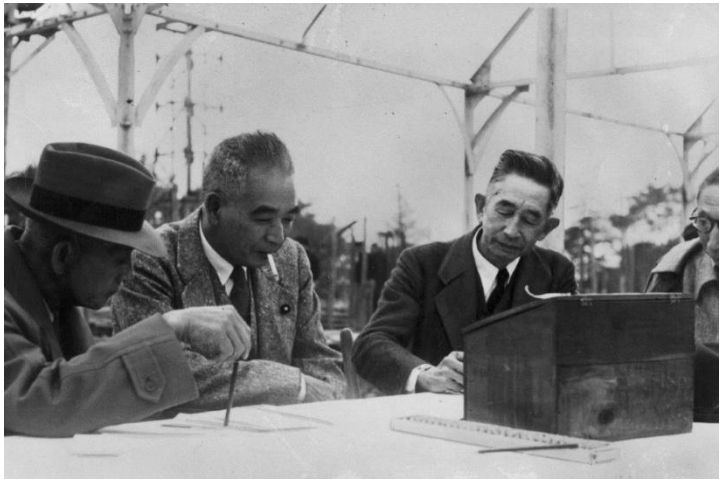
いま、プロゴルフ競技は花盛り。とりわけ女子プロの競技は電波に乗る機会も多く、男子プロを凌ぐ人気ぶりだ。男子は先のマスターズトーナメントに松山英樹が優勝して大きな話題になったが、人気の点では断然女子の方が優位のようだ。

今日、プロゴルフの競技に関心を寄せるファンは多いが、プロゴルフ競技花盛りのきっかけはいまを去ること70年前の1952年（昭和27年）。戦後のゴルフ復興期に、読売新聞社が賞金総額100万円の読売プロゴルフ選手権を開催したのが走りだ。大会のキャッチフレーズは「ワンパット10万円のスリル」。優勝賞金が30万円、2位が20万円。その差10万円だったことから10万円のスリルというキャッチフレーズが生まれた。

その頃100万円という言葉が流行した。売り出された宝くじの1等賞金が100万円。これが引き金になり、新聞や雑誌などで話題になり、さらに庶民の夢は100万円を手に入れることだった。

さて、読売プロゴルフ選手権は、横浜にあった程ヶ谷カントリー倶楽部が舞台で、当時、若手プロとして注目されていた林由郎（我孫子）が72ホールを通算296打のスコアで制した。翌年の二回目の大会には、富戸出身の石井朝夫が初優勝をとげた。石井は活躍の場を川奈から関東に移した矢先で、関東プロのトップクラスに躍り出た。

この競技は1961（昭和36）年まで続いた。その後キリンオープン、ダンロップオープンなどと主催者や大会の名称が変わったが、アジアサーキットの主要競技としてファンの関心を集めた。



《写真》
読売プロゴルフの第1回大会で運営に協力したJGA（日本ゴルフ協会）役員の方々
左から高石真五郎、石井光次郎、
中上川勇五郎、小寺酉二各氏

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（48）

【名物姉妹キャディーの物語】
（その1）バッグにいれて連れて帰りたい

ゴルフ場のキャディーといえば、今日では女性が多く活躍しているが、日本の女性キャディーの優秀さは海外でも知られている。そのきっかけになったのは1957（昭和32）年秋、霞ケ関カンツリー倶楽部で開かれたカナダカップだった。地元の霞ケ関カンツリー倶楽部のみならず、関東周辺の古いゴルフ場から選抜された優秀なハウスキャディーが参加し、各国プレーヤーのバッグを担いだ。

この大会の参加国で一番注目されたのはアメリカのサム・スニードだった。実力、人気ともにナンバーワンで、ゴルフ愛好家の注目の的だった。大会前、参加各国の競技者は練習ラウンドでゴルフ場を訪れ、随時コースを回ったが、サム・スニードは練習をためらった。聞くと『女性のキャディーでは心もとない』とコースに出るのを拒んだ。大会関係者は困惑していたところを、担当予定の女性キャディーはスニードのバッグを担いで足早に歩き出した。それを見たスニードは『OK』と小柄な女性キャディーを受け入れた。その女性は金子くら子さん。小柄だが倶楽部では頑張り屋の優秀なキャディーだった。

当初、拒否したスニードは熟練した仕事ぶりに感心し、競技では彼女が差し出すクラブを黙って受け取り使った。そればかりではなく、彼女に『ナンシー』というニックネームを付け、グリーンの傾斜の読み、距離の目測の助言に全幅の信頼を寄せた。そればかりではなく、大会が終わりになると、彼女を『キャディーバッグに入れて連れて帰りたい』と称賛しきり。その後、スニードは何度か来日したが、彼女にプレークラブをプレゼントして謝意を表した。現役を退いた彼女は、埼玉国体のゴルフ競技が東京ゴルフ倶楽部で行われた際、埼玉県代表の女子チームの世話役としてかいがいしく、動きまわっていた。

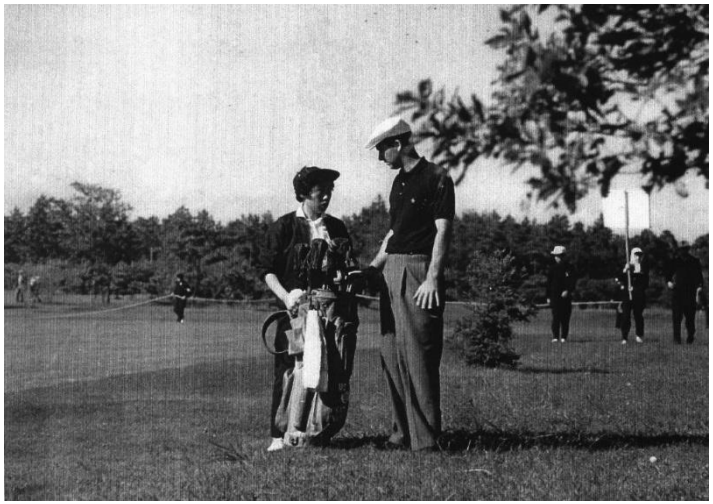
《写真》
カナダカップでサム・スニードに付き添う金子さん

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（49）

【名物姉妹キャディーの物語】
（その2）他倶楽部でも付き添いを求められた実力

1958（昭和33）年に開催された読売プロゴルフ選手権は、72ホールストロークプレーで争われたが、前半の36ホールを東京ゴルフ倶楽部で、後半の36ホールは1日おいて、相模原ゴルフクラブで行われた。大会は五日間という変則的な日程になった。アメリカからジャック・バーク、ケン・ベンチュリーというその時代のトップクラスの実力者が出場した。地元の日本勢はカナダカップで大活躍した中村寅吉が注目され、遠来のアメリア勢と第1日から激しいトップ争いを演じた。

新進気鋭のベンチュリーに川目昌子（霞ケ関カンツリー倶楽部の金子くら子の姉）という東京ゴルフ倶楽部のハウスキャディーが付き添った。ベンチュリーは初来日でプロに転向したばかり。2年前、1956（昭和31）年のマスターズではアマチュアながら優勝争いを演じ、初優勝か、と騒がれた新進気鋭のホープだった。しかし初の海外遠征で不安だらけの旅だったようだ。ところがキャディーを務めたに川目は、英語で対応しながら、ベンチュリーを勇気づけた。そこでベンチュリーは後半のプレーが行われる相模原ゴルフクラブでも、彼女に付き添ってもらいたいと異例の要求を持ち出した。キャディーは大会が行われる倶楽部のハウスキャディーが付き添うのが原則だ。主催者側は戸惑った。川目は『コースの特徴も芝のことも知らないので、無理です』と断り続けたが、ベンチュリーの懇願に競技委員長小寺酉二（日本ゴルフ協会常務理事）は『そこまで要求するなら・・・』と承認した。ベンチュリーは結局2位の好成績を収めたが、『優秀なキャディーのおかげだ』とプレー後は称賛しきりだった。



《写真》
知らぬコースで懸命に付き添う東京GCの川目さん＝相模原GCで

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（50）

【ドルのない時代の海外遠征】

今日、海外旅行をするとなれば、ある程度の額の米ドルを使えるから、好きなところへ足を運べる。だが、戦後のドルのない時代には持ち出せる額に厳しい制限があった。1ドルの円換算は360円という時代もあった。

1951（昭和26）年、アメリカからジャック・バークとロイド・マングラムというトップクラスのプロゴルファーが来日した。目的は日本に駐留する在日米軍兵士の慰問で、フィリピンオープン出場の帰途、小金井カントリー倶楽部と程ヶ谷カントリー倶楽部で模範プレーを披露した。その一人のマングラムは、シカゴの実業家が経営するゴルフ場の所属だった。経営者は1941（昭和16）年創始の高額賞金が懸かったプロゴルフ競技（タモシャンタ、オールアメリカン大会）のパトロンで知られていた。

当時、日本ゴルフ協会の副会長だった野村駿吉はアメリカ通で、日本のプロを海外のトーナメントに出場させたいという夢を持っていた。そこで遠来のプロを新橋の料亭へ招き、日本のプロも同席させて、日本のプロを招いてくれるよう懇願した。帰国したマングラムはオーナーに懇願してくれ、1952（昭和27）年に林由郎、島村祐正に川奈出身の石井廸夫の3人が出場できた。だが、3人の渡米に際し、日本のゴルフを統括していた協会事務局は渡米申請、外貨の持ち出し許可の取得を得るために苦労した。

外務省や大蔵省と度重なる折衝で渡米許可を得ている。このシカゴ遠征は、その後4年間続いたが、これが日本のプロにとっては戦後初の海外遠征だった。1954（昭和29）にはカナダカップ参加が認められ、中村寅吉、石井廸夫が出場し、1956（昭和31）年にはフィリピンオープンに林由郎、石井廸夫が参加できた。当時外務大臣だった藤山一郎、マニラの在外事務所代理の卜部敏男が献身的に協力をしてくれ、石井は3位タイの成績を残している。

《写真》
マングラム一行を招いて招待を懇願した会合

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（51）

【大和魂で戦え！ 】

《欲しがりません、勝つまでは・・・》。《撃ちてし止まん》。《大和魂で・・・》

太平洋戦争中、国民の戦意高揚を促す標語である。戦争の体験者にとっては忘れ難い言葉だろう。戦後、初めて米国に遠征した日本のプロたちがプレー中、『大和魂で戦え』という言葉を耳にしたそうだ。

1952（昭和27）年、米本土シカゴ（タモシャンタ世界プロゴルフ選手権）に遠征した日本のプロ（中村寅吉、島村祐正、川奈出身の石井廸夫）たちは、遠征先で現地在住の日系人からこんな声援を受けながら健闘した。大会の会場には大会関係者の配慮で日章旗が掲げられ『勇気百倍だった』と林由郎が語ったことがある。印象に残るのは『大和魂で戦え』という激励の言葉だったそうだ。戦後、戦いに敗れた日本では、国民の祝日であろうと日の丸を掲揚するのが禁止されていた。そんな体験のあるプロたちにとっては、見知らぬ外地で見た日の丸と日本語の応援は、勇気百倍だったろう。

戦時中、在米の日系人たちは収容所に送り込まれた辛い体験をしている。競技会場で日の丸を眺めた時の喜びは、日本から遠征したプロたちも同じ心境だったろう。

シカゴ（タモシャンタ世界プロ選手権）には、その後、林が単独で4回連続して出場した。

戦後間もない時期に、海外からの招待が舞い込んだのは1953（昭和28）年のフィリピンオープンだったが、敗戦国の日本人は容易に渡航できなかった。その代わり、日本国籍でなかった陳清水と小野光一（旧名・孫士均）は、台湾の人々の応援を受けて羽田からマニラへ飛んだ。日本のプロたちは指をくわえて見送っていたが、1956(昭和31)年になって日本国籍の林由郎と川奈出身の石井廸夫の二人が、海外での選手権に出場できた。

《写真》
シカゴのトーナメント会場の風景

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（52）

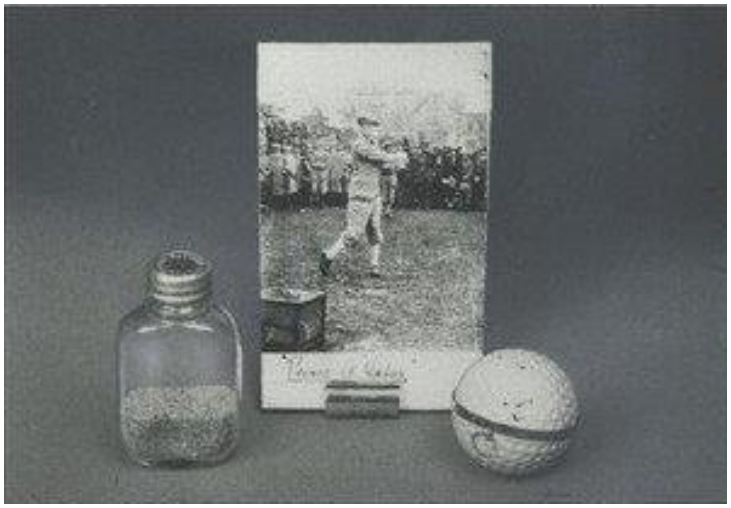
【皇太子の砂】

今日のゴルフは年齢を問わず、だれでもいつでも気軽に楽しめる。だが、現在のように普及していなかった時代は、おいそれと手軽には楽しめなかった。第一、用具のお値段が高く、ゴルフ場の会員になるとしても高額だったし、日本にはアメリカやイギリスのような安価にしてだれしも手軽に活用できる設備がなかったからだ。

ゴルフ用品のお値段は今日、普及の度合いに比例して求めやすくなっているが、いつの時代においても、安いお値段で購入できた用品といえばティーショットに使う『ティーペッグ（球台）』だった。それは木製で使いやすくお値段の安い用品だ。木製のティーが無かった時代は、付き添ったキャディーが砂と水を持ち運びながら、プレーヤーが指示する場所に水で練った砂を盛り、その上にボールを乗せた。いわゆる砂のティーのことで日本のゴルフ界も大正の時代はそうだった。

プロゴルフ界の長老だった浅見緑蔵は、その時代のことをこう話していた『オイ。小僧。ここだ』とゴルファーがプレークラブヘッドの底でティーの表面をトントンと叩くと、キャディーはそこに砂を盛り、ボールをその上に置きました』

以前のことだが、スコットランドのゴルフショップで英国のプリンス、ウィンザー公（1894～1972）が使った小瓶に入った砂とボールが店頭に陳列されていた。小瓶に入っている砂だったが、ティーペッグが開発される以前は貴重品だった。ティーは1890年代に入ってゴム製のティーが開発され、さらに針金のティーが出回ったが評判は芳しくなかった。木製のティーが出回り始めウォルター・ヘーゲンが愛用したのが評判となり、いまは木製のティーペッグ全盛期だ。



《写真》
ウィンザー公愛用の砂を入った小瓶とボール

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（53）

【国産機で世界1周　燃料よりゴルフバッグを】

1937（昭和12）年から同39（同14）年にかけて日本の航空業界は世界を『アッ！』と驚かせるような快挙で、日本の航空技術の優秀さをアピールした。

その第1号は同年春、朝日新聞社の後押しによって三菱重工が試作した単発の航空機『神風号』が、東京～ロンドン間を94時間余りかけて飛んだ。2年後の秋には毎日新聞社が後押した双発の『ニッポン号』が15万キロを超える距離を飛んで世界一周を達成した。

神風号は飯沼正明、塚越賢璽、ニッポン号は中尾純利が操縦かんを握った。飯沼、塚越は朝日新聞社の航空部員。一方の中尾は三菱のテストパイロット経験者で、のちに羽田の空港長を歴任している。

中尾は若いころからゴルフ好き。小金井カントリー倶楽部の会員だった。日本のゴルフ界ではこの時、中尾の快挙を記念するゴルフ大会を小金井カントリー倶楽部で開いた。日本のゴルフ界の大御所である大谷光明（日本ゴルフ協会チェアマン、会長）をはじめ赤星四郎、六郎の兄弟、佐賀・鍋島藩の鍋島直泰らゴルフ界の大物が出席し、中尾の快挙を祝福した。プレー後、参加者たちは中尾を囲んで苦労話に耳を傾けた。中尾はアメリカでゴルフ道具を購入して道中、飛行機に積んで各地を歴訪した。中尾は『ゴルフバッグを降ろしてその分、燃料を余分に積める』と各空港で言われたそうだが、がんとして拒否した。『私にとってゴルフバッグは命から2番目に大切なもの』という体験談に拍手喝采が多かったらしい。

《写真》
中尾の快挙を祝った記念ゴルフ会～
小金井カントリー倶楽部で

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（54）

【ニュース映画に登場した全日本オープンゴルフ】

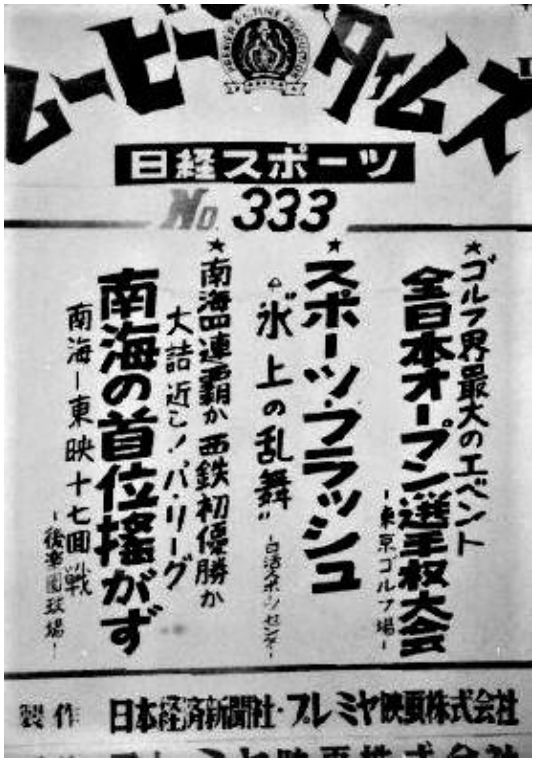
いまはテレビ全盛期だから動画は一般的に馴染み深い。だが、映画が娯楽の主役だった時代には、映画館で上映されるニュース映画は貴重な情報源だった。ニュース映画は新聞各社の関連会社によって制作され、各映画館に配給されて上映された。そのテーマは政界の動きを主として、時の話題、地方行政の動き、スポーツなどが取り上げられていた。上映時間は10分から20分ほどで、劇映画の前に公開されていた。

そのニュース映画に、かつて日本オープンゴルフが登場したことがある。1954（昭和29）年の秋。そのタイトルは、ゴルフ界最大のエベント《全日本オープン選手権大会》となっている。そのほかの話題としてアイススケートやプロ野球が取り上げられている。プロ野球のニュースとしては《南海の首位揺るがず》といった内容で、南海対東映の17回戦の模様も取り上げられている。

このニュース映画の製作元は日本経済新聞社の関連会社だった。

この年の日本オープンゴルフは、埼玉県の東京ゴルフ倶楽部で行われ、林由郎（当時、我孫子）が2度目の優勝をとげた。この時の林は2位の小針春芳（那須）に3打の差をつけて勝っている。小針春芳は川奈出身の石井廸夫（芦屋）と同スコアで2位を分け合った。

ニュース映画のタイトルは『全日本オープン』となっているが、正しくは『日本オープン』である。当時のマスコミは日本選手権が正式の名称であるにも関わらず、その規模を大きく印象づけるために、わざわざ『全』という文字をつけて報道していた。今日も英米のオープンゴルフ選手権には『全』をつけるのは同じような流れだろうか。



《写真》
1954年のニュース映画の
タイトルの一場面

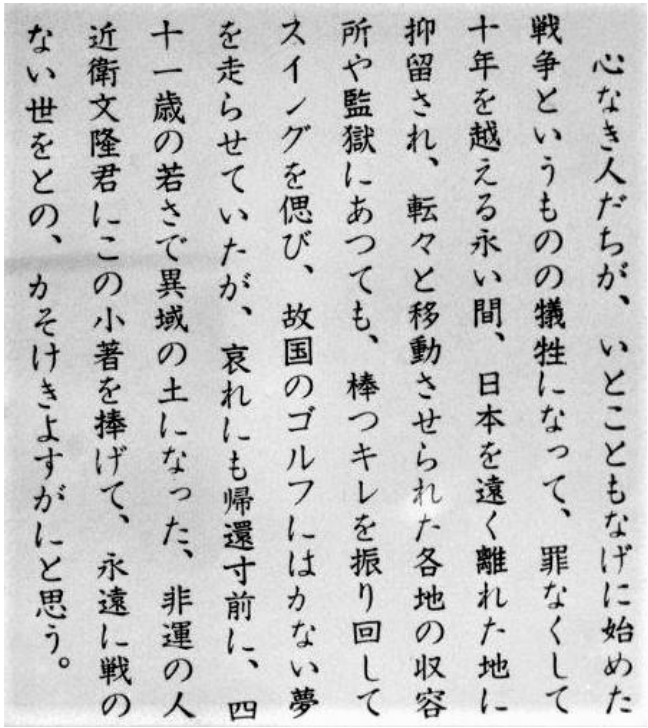
福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（55）

【大谷光明の子を思う心】

大谷光明（1885～1961）は日本ゴルフ界において父のような存在だった。西本願寺門主の大谷光尊の3男で、日本ゴルフ協会においてはチェアマン、会長を歴任した。明治の初期のことだが英国に留学してゴルフを知った。だが冬寒い国でのゴルフは身につかなかったが、帰国してから東京ゴルフ倶楽部に入会して、ゴルフの面白さを満喫した。英国では飛ばず、寄らずで関心は薄かったが、日本でのゴルフは魅力があり、熱中時代を送った。入会した倶楽部が横浜、神戸の外人倶楽部との対抗戦をやると、大谷はチームの中核として活躍した。だが難解な規則の解釈に悩み、勝てるゲームを失い、悔しい思いをした。そこで日本語のルールの必要性を痛感し、日本人ゴルファーのためにゴルフ界の組織化（日本ゴルフ協会の立ち上げ）に専念して規則の邦文化に生涯を捧げた。

邦文化の傍ら自費を投じて規則に関する書籍を出販し、会員になっている倶楽部の会員に配っている。茨木カンツリー倶楽部から出販したルールの解説書に義理の子息になる近衛文隆（1915～1956）の死を悼む心を纏めて付録にした。

大谷が近衛の存在を意識したのは1931（昭和6）年の日本アマ選手権（茨木カンツリー倶楽部）の折だった。16歳で初出場の近衛少年は予選を3位タイで通過し、ゴルフ界の新星と騒がれた。翌年、米国に留学し、帰国後は父・近衛文麿総理大臣の秘書官を務めた後に陸軍に入り旧満州に出征して終戦を迎えた。ところが、ソ連に抑留されて1956（昭和31）年、イワノボの収容者で病死という不運な生涯を閉じた。ご令嬢の夫君でもあり、大谷は計り知れない悲しみに包まれた。そこで子を思う親心を纏めて、子の死を悼んだ。



心なき人だちが、いとこともなげに始めた戦争というものの犠牲になって、罪なくして十年を越える永い間、日本を遠く離れた地に抑留され、転々と移動させられた各地の収容所や監獄にあつても、棒つキレを振り回してスイングを偲び、故国のゴルフにはかない夢を走らせていたが、哀れにも帰還寸前に、四十一歳の若さで異域の土になった、非運の人近衛文隆君にこの小著を捧げて、永遠に戦のない世をとの、かそけきよすがにと思う。

《写真》
大谷が纏めた子の死を悼む文面

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（56）

【本職が褒めた投網のうまさ　～赤星六郎が好んだ魚とり】

日本にゴルフというスポーツを普及させた人物として、真っ先に語りたいのは赤星四郎、六郎の兄弟である。赤星兄弟のうち、兄の四郎はペンシルバニア大学に学び、在学中はアメリカンフットボール部員として活躍した。1934（昭和9）年11月のことだが、YMCAで日本で初めてフットボールの試合、全日本学生軍×横浜の外人クラブの試合が行われたが、この時、四郎は競技方法や用語などについて解説をしたそうだ。

弟の六郎は若い時分のこと、健康面に不安を抱えていたので激しいスポーツを避けて、静かなゴルフ部に籍を置いた。1924（大正13）年春、大学ゴルフ部の合宿でのこと、たまたま合宿中に出場したパインハーストでのスプリングトーナメントに優勝し「東洋の新星」と騒がれたことがある。今日とは違い情報の流れが少なく、詳細が判明したのは1925（大正14）年、六郎が留学から帰国してからだった。

その六郎はけだしゴルフの虜と思われ勝ちだが、日常生活から眺めると、さにあらず。一番好んだのはゴルフより魚採りで、湘南・早川に居を構え酒匂川の河口に足を運び、投網でクロダイを獲るのを唯一の趣味にしていた。このため、ゴルフ界の長老たちは、魚取りに夢中でゴルフがおろそかになると余計な気配りをしたらしい。しかし投網の腕は確かで、本職の漁師が舌を巻くほどだった、といわれている。ゴルフ史家の小笠原勇八は太平洋戦争前のことだが、早川の赤星邸を何度となく訪問し、釣り上げたクロダイの味は忘れ難い、と語っていた。

《写真》
赤星六郎の投網

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（57）

【「恋の片瀬」のゴルフース】

流行歌手・菅原都々子のヒット曲に「江の島エレジー」があった。『恋の片瀬の浜千鳥（大高ひさを詞、倉若晴生曲）・・・・』 菅原の哀愁を帯びた声がヒット曲となり、テレビ、ラジオの歌番組でよく聞かれた。

江の島周辺は温暖な気候と海がきれいで、夏場は海水浴客で賑わう。その江の島から陸地を眺めて高台（藤沢市片瀬赤山）の一帯は、現在住宅地になっていて、その高台の周辺に昭和の初期のことだが18ホールのゴルフ場があった。鉄筋の倶楽部ハウスは宿泊設備もあり、都心から比較的交通の便がいいので、訪れるゴルファーは多かった。

ゴルフ場の主は佐藤和三郎（1902～1980）。獅子文六原作の『大番』の主人公赤羽丑之助のモデルといわれた人物で小説の中で牛ちゃんといわれた。ある日、村の資産家の娘に恋をして印刷したラブレターを渡したことから村中のスキャンダルになり、いたたまれなくなり家出して兜町の株仲買店に就職して働いた。長い経験を積んで兜町の風雲児といわれるようになり、戦前から戦後にかけて相場師として活躍した。ゴルフを覚えて伝統ある倶楽部の会員になり、ゴルフライフを楽しんでいたが、ふとしたことから会員たちの顰蹙を買い、除名される。そこでゴルフ好きな「牛ちゃん」は、私財を投じて自分のゴルフ場を造った（片瀬3丁目周辺）。

18万坪の丘陵地に1955（昭和30）年頃、プロゴルフ界の長老だった浅見緑蔵に依頼して18ホールのコースを完成させた。所属プロに浅見の弟子だった染谷利明がいた。コースは丘陵地が下地だから平らな足場がなく、ボールは思わぬ方向に転がったりした。ビギナーには少々厄介なコースだったが、歌舞伎俳優の尾上梅幸、映画俳優の宇佐美淳也といった顔ぶれがご常連で、小高い丘の上のから眺められる江の島の風景は美しかった。

《写真》
片瀬から眺望できた江の島の全景

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（58）

【軍服姿（在日米軍）のゴルファー】

この夏の8月15日は、76年目の終戦記念日だった。終戦の勅語に『堪え難きを堪え、忍び難きを忍び・・・』とあるが、戦争に敗れた日本国民は、復興を目指して一心に働き、切磋琢磨した結果、経済の成長も伴い、スポーツの普及が顕著だった。オリンピックは二度目の開催も無事に終えた。戦前のスポーツ界では考えられなかったことだ。ゴルフの普及、発展も目覚ましく、世界に自慢できるゴルフ大国に成長しているといえよう。その一例は学校の体育授業の正課に、ゴルフを採り入れているところもあるほどだ。これ程の普及の裏には、戦後の日本に進駐した米軍の存在を忘れてはならない。アメリカは世界に冠たるゴルフ王国だ。米軍の兵士は戦時中芋畑になっていたゴルフ場を機械力にものをいわせて昔のように復元させた。ゴルフを愛好するアメリカの国民性が発揮されている。

そのお陰で日本のゴルフ競技は、戦後すぐの1950（昭和25）年には復活している。千葉県の我孫子、神奈川県の相模、程ヶ谷、東京都の小金井、埼玉県の霞ケ関、東京などのゴルフ倶楽部は、米軍に接収されたお陰で、復興が早く、プロたちの活動開始も早かった。ゴルフ王国の兵士たちはプロの存在を意識して日本のプロとの交流が盛んだったし、応援もした。

したがって戦後再開された多くの競技には、腕自慢の軍服姿の兵士たちが日本のアマチュアと競った。母国ではゴルフのプロだった兵士もいたが、兵役に従事している間はアマチュア扱いになっていたから、日本でのアマチュア競技には参加できたし、日本のアマチュアは歯が立つすべはなかった。この写真は1951（昭和26）年の日本アマチュア選手権（日本ゴルフ協会主催）の表彰風景である。競技は米軍の兵士同士の優勝争いだった。勝ったのはアブラハム（写真中央）。立川の米空軍基地の兵士で、ランナーアップはジェニングス。GHQに勤務していた。

《写真》
1951（昭和26）年の日本アマの表彰式風景＝相模カンツリー倶楽部で

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（59）

【知られざる野村（JGA副会長）の貢献】
プロゴルフ協会の立ち上げなどへ

戦後、日本のゴルフを大衆化の方向に導き、さらに国際化とプロの存在価値を高めるために功績のあった人物として、野村駿吉（1889～1963）の存在を忘れてはならない。野村は岐阜県の出身、戦前派のゴルファーで、日本アマチュア選手権を始め倶楽部競技には数えきれないほど出場している。神戸高商（神戸大学）では日本ゴルフ協会の会長を務めた石井光次郎の親友で、石井とともに戦後の日本のゴルフ界のけん引役を担った。

社会人になってから石油の輸入の業務に関わり、カルテックスの役員を務めていた。野村は『ゴルフ普及のためには、プロの存在が重要である』と主張し、1957（昭和32）年の7月に日本プロゴルフ協会の立ち上げに尽力があった。

『プロは自分たちの手でやってゆくべきで、アマチュアの団体が関わっているよりスポンサーが付きやすい』が野村の持論だった。

戦後、ドルのない時代にプロが海外に出るとなると、野村はプロを呼び寄せ、ドル紙幣をそっと手渡していた。また、来日したアメリカのトッププロだったジャック・バークに留学の身元引受人を懇願し、広野育ちの橘田規と箱根の勝俣敏夫が約1年間、テキサス州に留学。橘田は帰国後、プロ競技で大活躍した。野村がプロを大切に育てるというエピソードの一部だ。

1963（昭和38）年5月に野村は他界し、日本ゴルフ協会葬が築地・本願寺で行われた。葬儀委員長は親友の石井光次郎。石井は弔辞で親友の死を悼むあまり、途中で絶句する場面があり、参列者の涙を誘った。

《写真》
アメリカ留学に旅立つ橘田（黒背広左）と勝俣（黒背広右）を見送る野村駿吉（左）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（60）

【昭和天皇の紛失球？】 事務所に保管されているボール

東京都民のオアシスとして知られる新宿御苑には、かつて皇族方専用のゴルフ場（9ホール）があり、その面影は今に残る。ゴルフコース誕生のきっかけは、昭和天皇がゴルフを愛好され、東京・駒沢にあった東京ゴルフ倶楽部のコースを何度となく訪問されたからだが、警備の面などの問題があり、専用のコースの建設が求められていた。そこで東京都心にある新宿御苑がコース建設用地の候補に上がり、大正の時代に入りゴルフ界の長老、大谷光明の設計で、コースが完成した。この土地はもともと長野の高遠藩主・内藤家のものだったが、廃藩置県を機に内藤家から国に返還され、農場試験場になった歴史がある。1906（明治39）年に新宿御苑として皇族専用の庭園になり、国が管理してきた。以前のことだが環境庁の管理のもと、池を含む広大な土地を大掃除したことがある。すると、園内の池の中からゴルフボールが見つかった。ボールは昭和初期に製造されたものだが、かつて皇族専用のゴルフ場だったという経緯から、昭和天皇がお使いだったボールではなかろうか、と思われた。

しかし、昭和天皇がお使いだったものという証拠はなく、管理事務所は発見以来、今日まで大切に保管してきた。

昭和天皇はご結婚後、皇后さまとお揃いで御苑のゴルフコースを訪問されているが、皇后さまの方がスコアはよかったと伝えられている。御苑のコースは戦時中に消えたが、皇族方以外には宮内省の関係者が利用していた。名前入りのボールだったら、持ち主はすぐ分かるが、その時代には名入りボールを使うこともなく、持ち主不明のままで古い時代のボールとして保管されている。ゴルフの歴史を後世に伝える材料として、残しておきたいものだ。

《写真》
新宿御苑の事務所に保管されている古い時代のゴルフボール

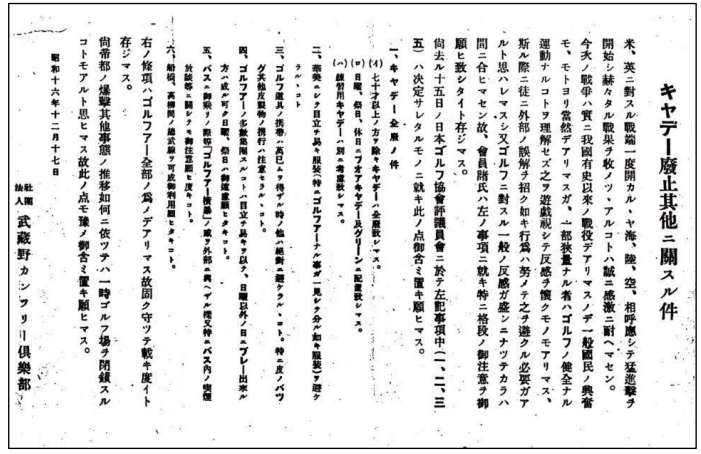
福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（61）

【キャディー廃止に関する通達】

日本国が英国、米国に対して宣戦布告をしたのは1941（昭和16）年の12月8日のことだった。日本のゴルフが発展の軌道に乗りかけた矢先の時代だったが、その直後に日本ゴルフ協会から加盟各倶楽部にキャディー廃止の通達文が回った。「贅沢は敵だ」「欲しがりません、勝つまでは・・・」と国は標語を掲げてひたすら国民感情を煽った。ゴルフ場で働いていた若者たちの中には召集令状を手に兵役に服する者も大勢いた。とにかく、英米で育ったゴルフに対しては白い眼が向けられたし、戦時中は外来スポーツ用語の使用は禁止された。例えば野球のストライクは《よし》。ゴルフは《棒球》。バレーボールは《排球》。バスケットボールは《篭球》といった具合にスポーツ用語の使用に対しての制限も厳しかった。

そんな時代を反映して日本ゴルフ協会では、苦難の時代の中での生き残り作戦の一環として、評議委員会の決定事項を加盟倶楽部に通達した。その中で大きな問題はキャディーの廃止だった。ところが、ゴルフプレー上、キャディーはつきものだし、規則上のことだから、協会は切り離せない。さりとて通達の骨子を曲げるわけにもゆかず、協会は苦悩した。

通達の骨子は、若者は戦線に駆り出されるので70歳以上の高齢者を除いてはキャディーを廃止というもの。そのほか派手な服装は禁じられ、地味な行動で慎むことが義務付けられた。当時のゴルファーたちはゴルフ場通いの際は持ち歩くクラブの本数を制限し、冬場だと《マント》の中に包み隠すようにしていた。このほかゴルフ協会からの通達事項にあるのは革のバッグの持ち運びまで制限されていて、贅沢は敵だ、そのものという環境だった。



キャデー廢止其他ニ關スル件

米、英ニ對スル戰端一度開カル、ヤ海、陸、空、相呼應シテ猛進撃ヲ開始シ赫々タル戰果ヲ收ツ、アルコトハ誠ニ感激ニ耐ヘマセン。今次ノ戰爭ハ實ニ我國有史以來ノ戰役デアリマスノデ一般國民ノ興奮モ、モトヨリ當然デアリマスガ、一部狹量ナル者ハゴルフノ健全ナル運動ナルコトヲ理解セズ之ヲ遊戯視シテ反感ヲ懷クモノモアリマス、斯ル際ニ徒ニ外部ノ誤解ヲ招ク如キ行爲ハ勢ノモテ之ヲ避クル必要ガアルト思ハレマスシ又ゴルフニ對スル一般ノ反感ガ盛ンニナツテカラハ間ニ合ヒマセン故、會員諸氏ハ左ノ事項ニ就キ特ニ格段ノ御注意ヲ御願ヒ致シタイト存ジマス。

尙去ル十五日ノ日本ゴルフ協會評議員會ニ於テ左記事項中（一、二、三、五）ハ決定サレタルモノニ就キ此ノ点御含ミ置キ願ヒマス。

一、キャデー全廢ノ件

(イ) 七十才以上ノカヲ除キキャデーハ全廢致シマス。

(ロ) 日曜、祭日、休日ニカヲ除キプロフキャデー及グリーンニ配置致シマス。

(ハ) 臨時用キャデーハ例ニ準置致シマス。

二、服裝ハシレノ目立ヤ易キ服裝（特ニゴルフアーナル事ガ一見シタ分ル如キ服裝）ヲ避ケラルベシコト

三、ゴルフ道具ノ携帶ハ高已ムヲ得ザル時ノ他ハ絡綿ニ避ケタルベシト、特ニ皮ノバッグ其他皮製物ノ携行ハ控慎キタルベシコト。

四、ゴルフアーノ多數集團スルコトハ目立チ易キヲ以テ、日曜以外ノ日ニプレー出來ル力ハ成ル可ク日曜、祭日ハ御遠慮願ヒタキコト。

五、バスハ御用ノ際ゴルフアー諸氏ノ數ノ外部ニ見ヘザル様又特ニバス内ノ雰囲気ニ就キ注意ヲ可成御利用ヲ願ヒタキコト。

六、給與、其他関ノ組織ハ可成簡単ニ致キコト。

右ノ條項ハゴルフアー全部ノ爲ノデアリマス故固ク守ツテ戴キ度イト存ジマス。

尙帝都ノ爆撃其他事態ノ推移如何ニ依ツテハ一時ゴルフ場ヲ閉鎖スルコトモアルト思ヒマス故此ノ点モ豫ノ御含ミ置キ願ヒマス。

昭和十六年十二月十七日

社團法人 武蔵野カントリー倶樂部

《写真》
ゴルフ協会のキャディー禁止の通達文～
宛先は武蔵野GCから会員諸氏に配布された

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（62）

【日本アマ、オープンの優勝カップ物語】

日本における数あるゴルフ競技の中で、一番歴史が古いのは日本アマチュア選手権である。競技の原点は横浜と神戸の外人ゴルフクラブの対抗戦で、起源は1907（明治40）年のこと。日本にはまだゴルフが普及していなかった時代である。

競技はやがて団体戦から個人戦という流れに代わり、1918（大正7）年にはアメリカでゴルフを履修した商社マンの井上信らが出場した。現在は日本アマチュア選手権として日本ゴルフ協会の主催で行われている。この競技の優勝者に与えられるカップは、その時代の対抗戦に使われていたものを引き継いでいる。

ついで協会が主催する重要な競技は日本オープン選手権だ。第一回は1927（昭和2）年に行われ、優勝はアマチュアの赤星六郎。だがこの時には優勝カップはなく、参加は僅かに17人だった。しかし二回目以降は若いプロたちの技術が向上してアマチュアを寄せ付けなかった。競技優勝者に贈られるカップが誕生したのは1928（昭和3）年だった。大谷光明（元日本ゴルフ協会会長）発案によるもので、形は正倉院の宝物を参考にして制作されたといわれ、最初のカップは浅見緑蔵が獲得した。カップの形は《何となく宗教臭い》という影の声もあった。その後、ゴルフ界では銀製品の使用が禁止され、やがて銀器献納という事態に陥って大砲の弾になって消えたカップもある。1941（昭和16）年、戦前最後の大会で当時朝鮮（韓国）の延徳春（日本名を延原徳春）が優勝し、由緒あるカップをソウルに持ち帰ったが、太平洋戦争を挟み、カップは行方不明になった。1950（昭和25）年に日本オープンが再開され、その2年後には現在のカップが制作されて中村寅吉が獲得した。大会は川奈ホテルのコースで行われた。

日本ゴルフ協会は創立55年を記念して初代のカップを復元したが、大会に使われることはなく、飾り物になったままだ。

《写真》
格調高い日本オープンの初代の優勝カップ。戦前、最後に受け取ったのは延徳春だった。

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（63）

【ゴルフの元祖コルベン】

ゴルフというスポーツは、スコットランドが発祥の地というのが定説になっているが、いや、オランダだ、中国だ、ヨーロッパだという幾多の説があり、これといった決め手がないのが現状だ。石井光次郎が日本ゴルフ協会の会長時代の1963（昭和38）年の4月のこと、日本ゴルフ協会の事務局にオランダの商社の東京支店からスポーツ用品らしい用具が持ち込まれたことがある。同社のフエルーフゼネラルマネージャーによると、オランダの古典的なスポーツの用具で氷上で遊ぶもの、という説明だった。早速、石井会長が絨毯の上でパティングフォームのスタイルでボールを転がしてみた。

この用具はコルベン（KOLVEN）という名の氷上スポーツ用のもので、ゴルフの元祖という説があり、16世紀から18世紀にオランダでは盛んに行われていたそうだ。オランダは寒い国で、氷上スポーツが盛んでスピードスケートでは優秀なスケーターを輩出しているのは広く知られている。

遊び方は長い棒でクリケットのボールを叩き数十メートル離れた的に当てる競技で、少ない数で当てた方が勝ちというゲームとのことだった。これが今日のゴルフに発展していったということは容易に想像できる。しかし、日本にも奈良朝時代に『打毬』という遊びがあった。西暦727年のことだが、正月になると王子たちが春日野に集まり打毬に興じたとのいわれがある。打毬は馬に乗り、2組に分かれて打毬杖で地上にある毬を毬門（ゴール）に投げ入れる競技である。

《写真》
コルベンのクラブで試し打ちする石井・日本ゴルフ協会会長

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（64）

【ゴミは『はたき』で『はたく』べし】

ゴルフのプレーが終わった時、礼儀作法として真っ先に守らなければならないことは、クラブハウスに入る前、ゴルフシューズにまつわりついた芝くずや埃を払い落すことだ。このため、いずこのゴルフ場も出入口のそばにシューズの埃を払う『はたき』や空気圧でシューと埃を吹き払う掃除機を設置している。

はたきを設置しているのは、まさに日本に生まれた日常の家庭文化の習慣で、外国では見当たらない。これぞ日本独特の文化遺産といえないだろうか。最近では電力を使い空気を送る〝シュー〟とひと吹きの掃除機を設置しているゴルフ場が多い。自動化が進んでいる証だ。ところが出入り口で眺めていると、『はたき』でゴミを払うゴルファーの数は少ない。掃除機で『シュー』とやる方が楽だから、こちらを好むようだ。加えてこちらの方がよく落ちるから、圧倒的に使用頻度が高いようだ。

ご覧のはたきを並べているのは昭和初期に開場の会員制相模カンツリー倶楽部である。同倶楽部には電動式のゴミ落とし機も備えてはいるが、ベテラン会員たちは『はたき』を好むようだ。日本家屋での生活には、ほうき、はたきが馴染むし、その方が日常生活の延長で気楽に使えるからだろう。

ハウス内では脱帽は当然。食堂では中央の席を陣取るのは避け、会話は小声で。礼儀作法に厳しい倶楽部は、夏季を除き昼食時には上着着用が義務付けられている。かた苦しい話かもしれないが、礼儀正しいゴルフでは当然のことだろう。廊下で見知らぬプレーヤーとすれ違う際は、軽く会釈を交すべきだろう。廊下は努めて端を通るべし。ハウスの入口に自動車を乗りつけるのは遠慮すべきだろう。

《写真》
相模カンツリー倶楽部クラブハウスの出入り口に設置されているはたき

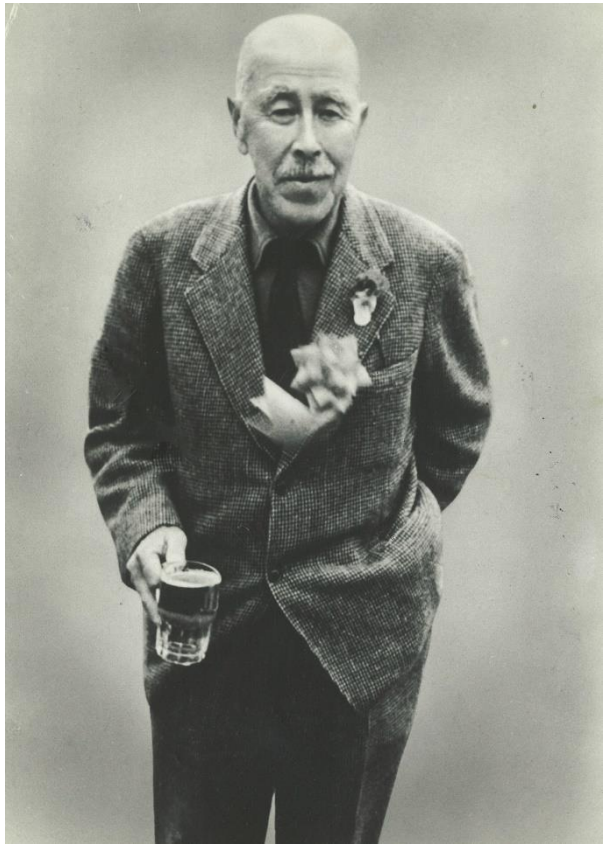
福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（65）

【日本のアマチュア初の海外遠征】

日本のアマチュアゴルファーが初めて海外に遠征したのは1924（大正13）年の11月のことで、第1回のチャイナ・アマチュア選手権出場のためだった。この大会は上海・江湾のコースで行われ、大谷光明、赤星四郎のほか坂本史科や、在上海の日本人の谷内憲行らが出場した。だが、日本のゴルフ史や年表にはこの遠征に関して1行も書かれていない。大正13年の頃には、国内にあるチャンピオンシップコースといえば、18ホール完備のゴルフ場は旧程ヶ谷カントリー倶楽部のみ。コース事情は貧弱だったが、日本アマチュアのタイトルはすでに在留外国人の手から離れ、日本人ゴルファーの成長が著しかった。それ故に遠征した一行は、東洋の覇権を目指す心意気だった。大谷光明は当時実力ナンバーワンのイギリス人、M・バットに対し〝打倒バット〟の意気込みに燃えていた。だが天運に恵まれず、赤星四郎が6位で大谷は12位という成績だった。

二度目の挑戦は1926（大正15）年のこと。第1回の大谷、赤星に加え赤星六郎、川崎肇、関西の室谷藤七が『今度こそ』の意気に燃えて出場した。川崎が健闘して優勝したバットに肉薄したが、最終ホールでパットをしくじり3位に留まった。

優勝したバットはその後、日本を訪れた。1933（昭和8）年の日本オープに出場し、赤星兄弟とベストアマチュア争いを演じ、結果は16位タイの成績を残した。日本ゴルフ協会はバットがラウンド中に76のスコアをマークした実績に対して金メダルを贈った。バットは『金メダルを貰ってうれしい。いずれは、また日本を訪ねたい』と言い残して日本を去った。アマチュアの初の海外遠征に残る古い話題だ。



《写真》
チャイナアマに出場した大谷光明

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（66）

【女性初のシングルハンディ誕生】
横河初子（東京ゴルフ倶楽部家族会員）が9

戦後、日本のゴルフが本格的に復興したのは、1953（昭和28）年頃のこと。日本に駐留したゴルフ愛好国の米軍は、戦時中芋畑になっていたゴルフ場を復旧させた。終戦から数年を経てからだった。関東地域の女子ゴルファーたちは戦前に創設されたゴルフ場の会員 “戦前派”が多かった。そのため、その前後は戦前派がゴルフ場に復帰した。

日本に駐留した米軍人の奥方もゴルフ好きが多いらしく、時折日本のご婦人方との親善ゴルフ会を相模カンツリー倶楽部で開いていた。

関東の女子ゴルフの競技が戦後開かれたのは1955（昭和30）年のこと。参加者は戦前派が多く、若い世代のご婦人方は出る幕はなかった。

ゴルフの復旧とともにこの時代の話題は、女性ゴルフ界からいつ、シングルハンディが生まれるだろうか、だった。その頃に競技で活躍していたご婦人連は比較的年齢が高い方が多かったが、礼儀作法には厳しく、オーソドックスな打法を身に着けていたので、シングルハンディ誕生近し、とみられていた。関東女子競技の始まりは1955（昭和30）年だが、その頃の腕達者な奥様ゴルファーは、ハーフを30台のスコアで回っていた。

1959（昭和34）年12月2日。東京ゴルフ倶楽部のハンディキャップ委員会は婦人会員の横河初子のハンディを『9』と認定した。女性初のシングルハンディの誕生だった。当時、横河の髪型は断髪、ロイドメガネをかけ、べらんめー口調で、取材の新聞記者に《おい、君》と声をかけるのもしばしば。周囲はいつしか、《初太郎》という勇ましいニックネームを献上していた。

《写真》
関東女子ゴルフ選手権に優勝した
横河初子（写真中央）

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（67）

【鬼をもしのぐマーカット少将】

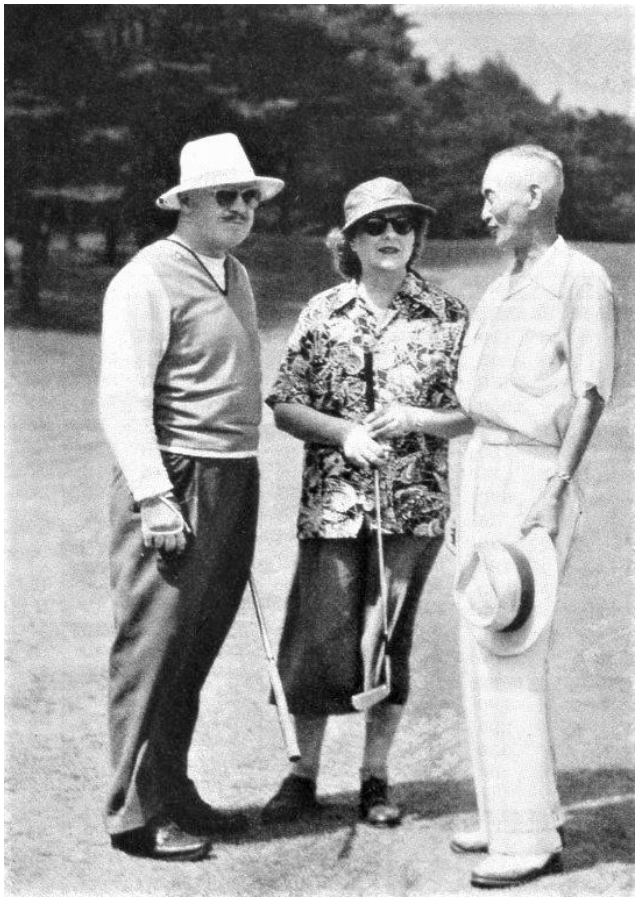
1945（昭和20）年8月、日本は太平洋戦争に敗れ、連合国軍が日本に駐留した。連合国軍の総司令官マッカーサー元帥が空路、厚木の飛行場に舞い降りた。その部下GHQの経済科学局長だったW・F・マーカット少将の名をご記憶だろうか。マーカット少将は連合国軍が日本に駐留している間、財閥の解体や独占禁止法、民主的労働法など、日本の民主化のために推進してきた中心人物だった。

「鬼をもしのぐ」と言われたのは1947（昭和22）年のこと。官公労のゼネスト（産業別の枠を超えて全国、あるいは同一で行うスト）の中止命令の勧告文を出した折のこと。日本の経済界にとっては怖い存在になった。

だが、その半面、ゴルフや野球を愛するアメリカ型の紳士だった。1951（昭和26）年の秋、夫人同伴で軽井沢ゴルフ倶楽部をプレーしてゴルフを楽しんでいる。しかし、職務上、のんびりできなかったとみえ、プレーが終わると『素晴らしいコースだ』とひと事言い残して引き上げた。

好きな野球では凝った一面を見せた。プロ野球の第一回日本シリーズではサンフランシスコ・シールスのオドール監督、大リーグの大打者ジョー・ディマジオとともに始球式に登場して滑稽な仕草で満場を沸かせた。この時、マーカット少将は捕手役を務めた。ゴルフは軍人になる以前、シアトルの新聞社時代に自動車の担当記者をしている時に覚えたそうだ。

上司のマッカーサー元帥はオリンピック米チームの団長を務めたことがある。当時のGHQには、スポーツマンが揃っていた。



《写真》
軽井沢でゴルフを楽しむマーカット少将夫妻

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（68）

【小寺酉二の英語力と正しい報道】

戦後、日本ゴルフ協会で専務理事などの要職をこなした小寺酉二（1897～1976）は、慶應義塾大を卒業後アメリカのプリンストン大学に留学し、帰国後母校で、英語の教師として教壇に立っていた。ところが戦後、日本のゴルフが復興し、関東のゴルフ連盟ではルールの改正など英語が必要になり、請われて役員に就任した。戦後すぐの競技には在日アメリカ軍人らが多数参加したので英語力が必要だった。そこで小寺の英語が力を発揮して、スムーズな運営ができた。しかもゴルフに関する知識が豊富で、ゴルフトーナメントを開こうとする協賛社からは助言を求められて引く手あまただった。支援したトーナメントで、今日まで続いているものでは『中日クラウンズゴルフ』が代表例だ。

さらに小寺はゴルフ競技が新聞のスポーツ欄で報道されるようになると、担当記者と懇意になり、ルールの解説やゴルフ用語の説明を丁寧に説いていた。記者がゴルフをやろうとすれば、名門倶楽部とプレーに関して、折衝を厭わなかった。時には記者団とプレーを楽しみ、ルールの処置については実地指導もした。小寺の心の中には、ゴルフの普及とスポーツとして正確に報道されることしかなかった。ご本人はゴルフを学生時代に始め、東京ゴルフ倶楽部、廣野ゴルフ倶楽部の会員だった。競技歴は1932（昭和7）年、日本アマ予選のストロークプレーでは4位タイ。マッチプレーでも健闘してベスト4に食い込んでいる。翌33（昭和8）年の関西アマでは決勝に進出し、英国人のコーンと優勝を争ったが、5＆3で惜敗した。

戦後、日本のゴルフ界を動かした3本柱がいる。石井光次郎、野村駿吉とそれに小寺である。

《写真》
戦後再開された関東の競技には大勢の米軍兵士が参加した。小寺（写真中央）は、得意の英語で競技を取り仕切った。

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（69）

【井上準之助のゴルフ】

日銀総裁、大蔵大臣などの要職を歴任した井上準之助（1869～1932）は、大分県日田の出身で、東京大学を出て銀行家になり、勤務の一環として海外勤務も経験している。ニューヨークの支店に勤務した時代、その余暇はゴルフに凝った。

ニューヨークでは生糸商の新井領一郎らとの親交があり、新井からゴルフの面白さを教えられ、ゴルフに関する豊富な知識を身に着けて普及の一翼を担った。

明治の終わりに帰国して、日本ではゴルフ倶楽部創設の主導的な役を担っている。1914（大正3）年に開場した東京ゴルフ倶楽部の建設に関しては、土地の借り入れに始まり、倶楽部の運営に関するすべてを取り仕切った。9ホール分の土地3万坪を借りて建設が始まったが、当時としては地代年1500円と高価で、当初は果たして高額な借地代が払えるかが疑問視されていた。何しろ日本で初めてのゴルフ場運営だから、さすがの銀行家も自信がなかったらしい。

ところが財政家の井上は経営には自信がなかったものの、ゴルフ場ができて閑古鳥が泣いても、建設費のほかに3万5千円の資金を集めて、銀行利子や公社債の利回りで地代が払えるように妙手を打った。

ゴルフ場の倶楽部ハウスといえば、東京ゴルフ倶楽部のそれは1914（大正3）年、大正天皇即位の記念に建てられた大正博覧会の貴賓館を5千円で払い下げてもらい、これを移築して使った。井上の発案だった。

ゴルフ場は順調に動きだしたが、井上は1932（昭和7）年2月9日、血盟団の小沼正にピストルで射殺された。その年の5月に倶楽部は埼玉県の朝霞に移転して開場したが、倶楽部創立に骨折った井上は、新ゴルフコースではクラブを振らず仕舞だった。

《写真》
大分県日田市にある井上の生家

福島靖の取材メモ・写真にみる日本のゴルフ史（70）

【大倉喜七郎　音楽の泉】

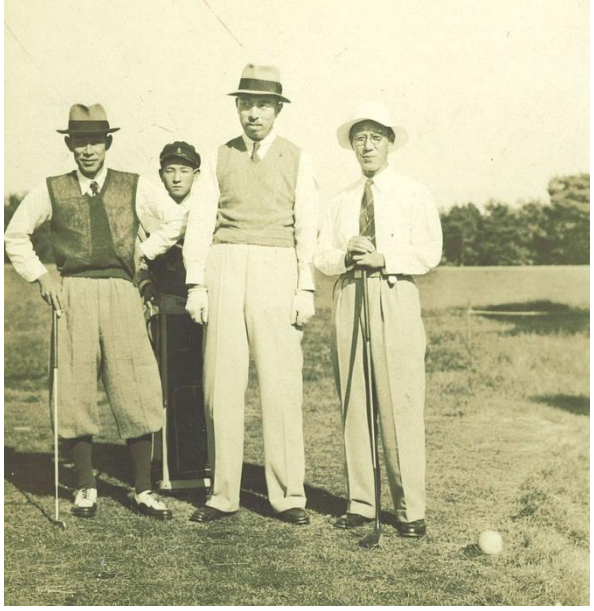
大倉財閥総帥の初代、大倉喜八郎（1837～1928）は、89歳の高齢にも関わらず、ビジネスのためなら、遠く満州、蒙古や中国へ旅に出かけるのはいとわなかったそうだ。それば かりではなく、気骨の人ともいわれた。これに対して、二代目の喜七郎（1882～1963）は鼻メガネをかけた英国型の温厚な紳士だったそうで、先代より繊細な神経の持ち主だったともいわれた。さらに豊富な趣味の持ち主でもあった。その中でも音楽に関するものは格別だったらしい。

知人が語ってくれた話だが、昭和初期のある夜のこと、川奈ホテルの一室から宵闇に乗って音楽が流れてきた。そこで足を運んでみたら喜七郎が自ら発明した《オークラウロ》という管楽器を奏でていた。オークラウロは尺八を洋風化したような楽器で、喜七郎がこれを吹き、巖本真理がバイオリンを弾き、チェロとピアノとで四重奏を楽しんでいたそうだ。

当時、喜七郎は大和楽という新しい分野の邦楽を創造していた、邦楽に洋楽の合奏法を取り入れようとした試みの一環だったらしい。音楽に造詣の深い喜七郎ならではの試みだったに違いない。

このように音楽に造詣の深かったこともあるが、クラッシック音楽界の強力な支援者でもあった。これは音楽界でも有名な話で、前シリーズ『伊豆伊東のゴルフ物語』の52話で「オペラの藤原義江が楽団ゴルフトーナメントに参加したが、後半崩れて賞品にありつけなかった。気の毒に思った喜七郎は音楽、ゴルフ関係者を大勢招いて『ベターハーフの会』を開催した」のは紹介した通りで、いまに残る喜七郎の音楽に関するエピソードだ。

◇ご高覧賜り有難うございました。



《写真》
ゴルフを楽しむ近衛文麿元総理（中央）、
その右が大倉喜七郎、
左端は作家の伊藤正徳。
川奈ホテルゴルフコースで